２０２３年度

卒業生・修了生および就職先からのアンケート調査報告書

２０２４年３月

宮崎大学工学部・工学研究科

2024 年 3 月

卒業生・修了生および就職先からのアンケート調査結果公表にあたって

工学部長・工学研究科長 鈴木 祥広

宮崎大学工学部では教育の質的向上を目指して、ディプロマポリシーの修得度、有用度に関するアンケートを卒業生・修了生に対して毎年、就職先に対しては３年に１度程度の頻度で実施しています。具体的には、卒業生・修了生に対しては、ディプロマポリシーとして掲げている各種能力を工学部卒業・修了時にどの程度身につけたと感じているか（修得度)、および、その能力が社会人になった後どの程度役立っているか（有用度）を調査しています。また、就職先に対しては、ディプロマポリシーとして掲げている各種能力を自社に就職した卒業生・修了生がどの程度身につけていると感じているか調査しています。

本報告書では、2019 年度卒業生を対象とした「卒業生・修了生からのアンケート調査」の集計・分析結果を公表します。

宮崎大学工学部では、宮崎大学の使命の１つである変動する時代及び社会の多様な要請に応え得る人材の育成を遂行するために、アンケート調査結果を今後の教育改善の推進に活かします。

最後になりましたが、本調査にご協力いただいた方々にこの場を借りて御礼申し上げます。

目次

【工学部】

環境応用化学科 1
社会環境システム工学科 4
環境ロボティクス学科 7
機械設計システム工学科 10
電子物理工学科 12
電気システム工学科 15
情報システム工学科 18

【工学研究科】

工学研究科全体 21
環境応用化学分野 23
社会環境システム工学分野 25
環境ロボティクス分野 27
機械設計システム工学分野 29
電子物理工学分野 31
電気システム工学分野 33
情報システム工学分野 35

工学部

●環境応用化学科

１．環境応用化学科卒業生の業種別回答者数

業種名	回答数	割合 (%)
3　繊維工業	1	20.0
12　電気・ガス・熱供給・水道業	1	20.0
17　金融業	1	20.0
21　学校教育	1	20.0
24　その他	1	20.0
Total	5	100.0

２．環境応用化学科のディプロマポリシー

A-1 自然、歴史、文化などの種々の我々を取り巻く環境を理解し、そこにおける自己を把握すると共に地球環境と調和した人類の発展を多面的に考えることができる能力。

A-2 社会への環境応用化学の役割と使命を理解し、応用化学を基礎とする技術者としての社会への貢献と責任について考えることができる能力。

B 変化に対応するための自主的、継続的な学習、および探求をすることができる能力。

C-1 日本語による論理的な記述力を中心とするコミュニケーション能力。

C-2 英語の読解ならびに基礎的なコミュニケーションをすることができる能力。

D 社会の要求の本質を理解して解決するデザインができ、環境、安全、経済性などの制約を考慮しながら計画的且つ柔軟に問題を解決することができる能力。さらに、チームで仕事を達成することを学ぶ能力。

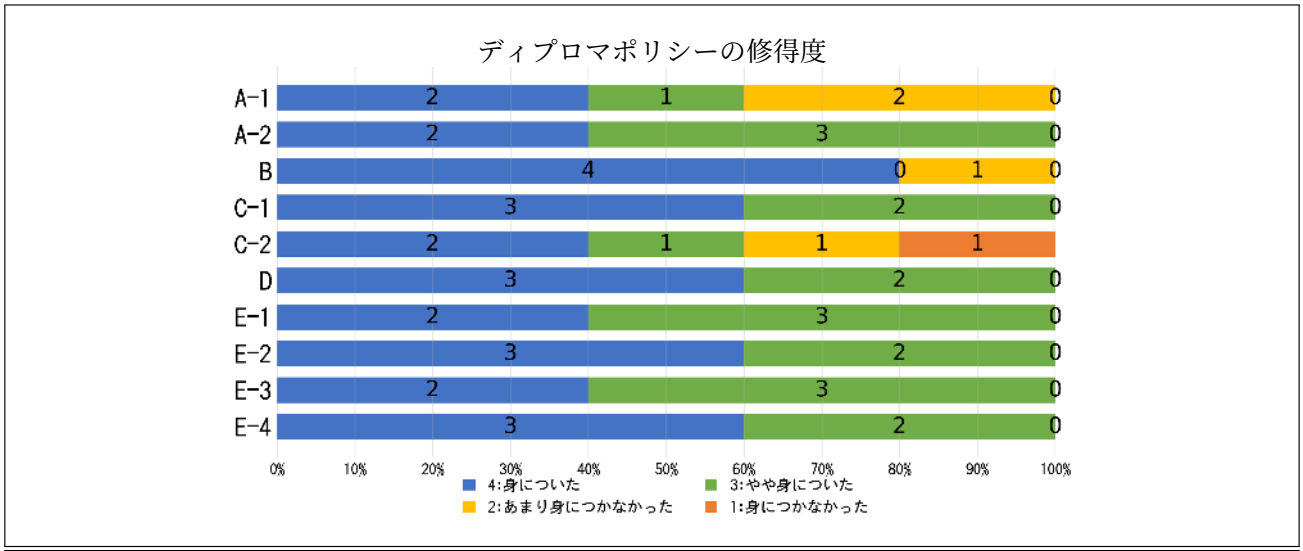
E-1 数学、物理学、環境科学および情報科学に関する基礎知識とそれらを応用することができる能力。

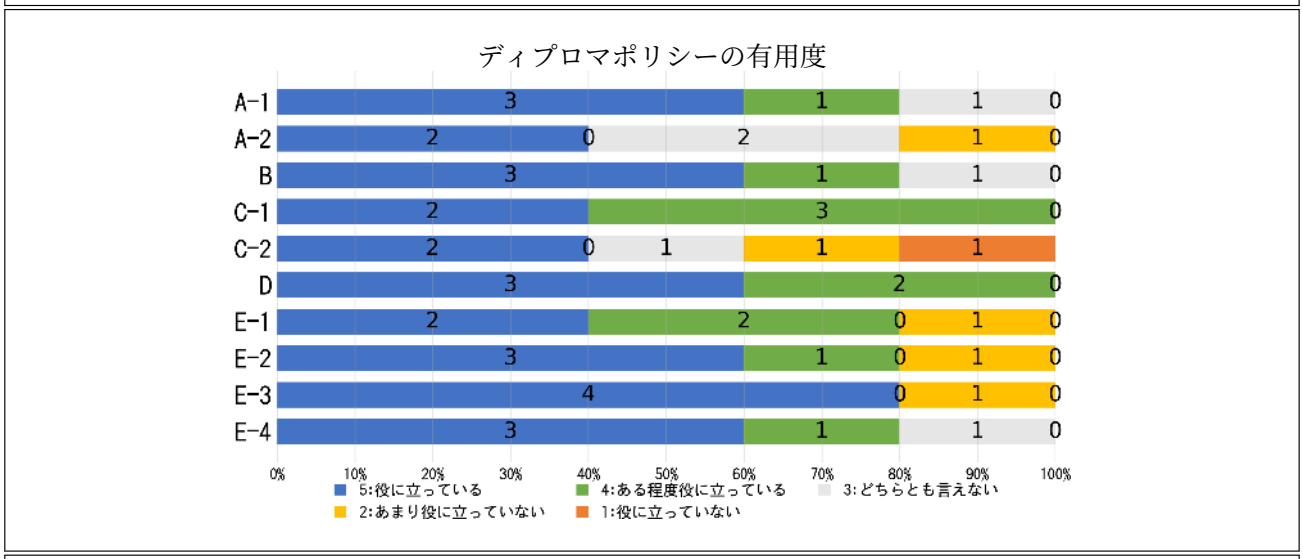
E-2 物理化学、無機化学、有機化学、生物化学、化学工学、環境化学などの専門基礎知識を修得し、それらを応用することができる能力。

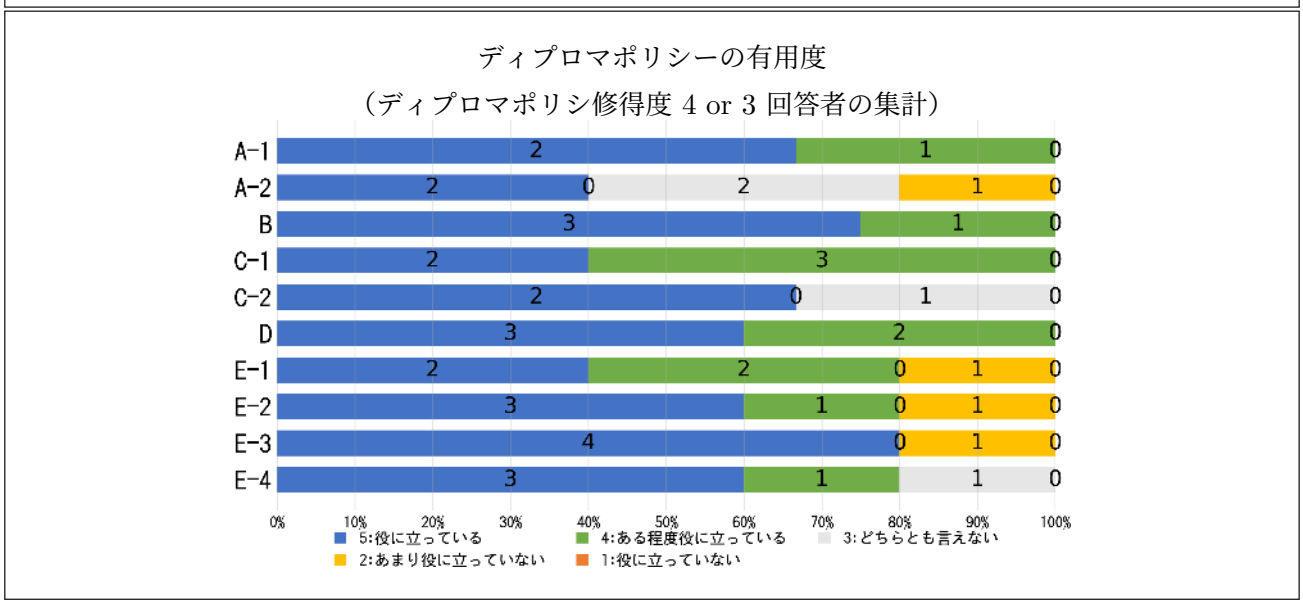
E-3 物理化学、無機化学、有機化学、生物化学、化学工学、環境化学などの応用化学に関する問題を解決することができる能力。

E-4 修得した実験技術に基づき実験を計画・遂行し、得られた結果をまとめ、説明し考察することができる能力。

３．環境応用化学科卒業生のアンケート結果







４．環境応用化学科のアンケート結果の評価

社会的責任感 (B)、デザイン能力 (D)、および専門知識 (E) の習得については自己評価が高く、卒業後に求められる能力を教育できていると判断できる。一方で多面的に考える教養性 (A) および英語能力 (C-2) への自己評価が低い。A については令和 6 年度からの教養教育改編、C-2 については令和 3 年度の改組後の英語教育の成果について期待するところである。

●社会環境システム工学科

１．社会環境システム工学科卒業生の業種別回答者数

業種名	回答数	割合 (%)
1　建設業	15	53.6
20　その他の専門・技術サービス業 (建設コンサルタントを含む)	2	7.1
23　地方法務員	10	35.7
24　その他	1	3.6
Total	28	100.0

２．社会環境システム工学科のディプロマポリシー

A-1 数学を含めた自然科学の知識：土木環境工学の技術者に必要となる専門知識を獲得する際に要求される数学、物理学などの基礎知識と情報処理技術に関する基礎知識を身につけている。

A-2 コミュニケーション能力：調査・実験・研究内容や成果について図表などを使って正確でわかりやすく記述、発表や質疑応答ができるとともに、専門分野に関する英語を理解・記述するための基礎的な能力を身につけている。

A-3 自己学習能力：土木環境工学の分野に興味を持ち、演習などを通じて自主的に学習する習慣を身につけている。

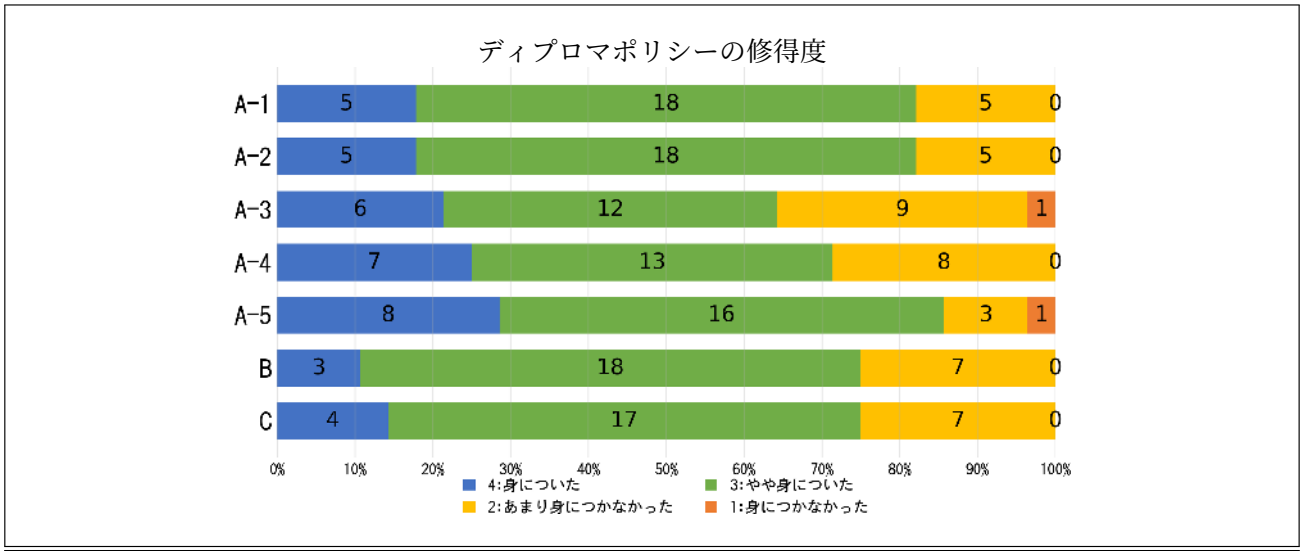
A-4 課題解決能力：土木環境工学の分野における課題の発見から解決にいたる手順や方策を計画・遂行できる能力を身につけている。また、調査や実験を計画・遂行し、結果を正確に解析して考察する一連のプロセスを体得している。また、チームで仕事をするための能力を身につけている。

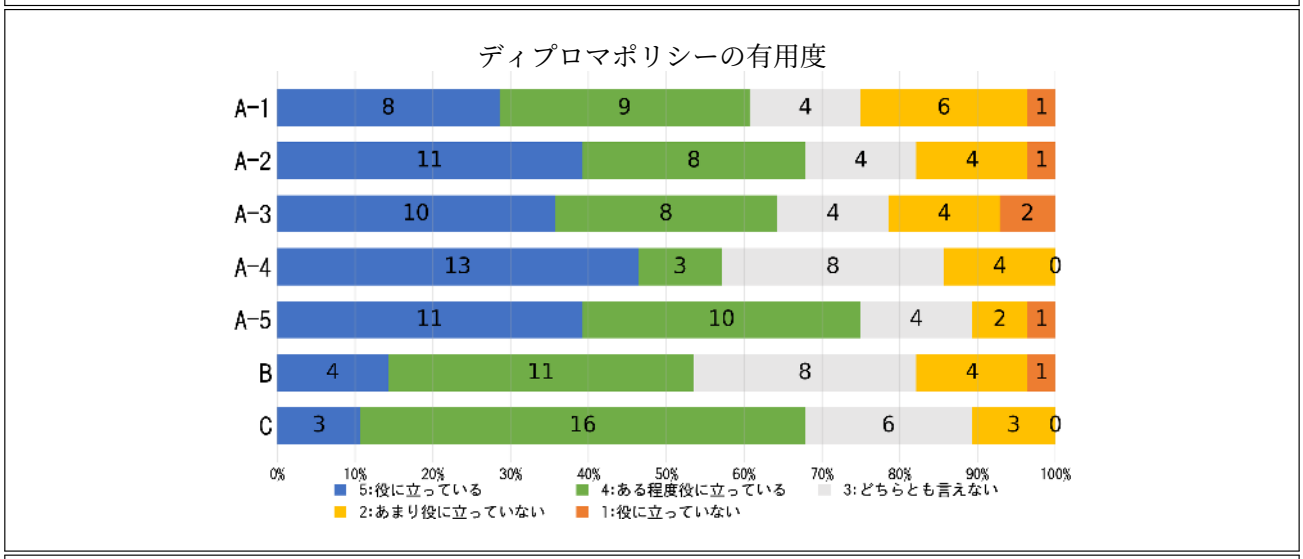
A-5 技術者としての倫理：工学技術が社会や自然に及ぼす影響や効果を理解するとともに、公共の福祉の向上と環境保全を使命とする土木環境工学の技術者として必要な倫理・規範や責任を理解・判断できる能力を身につけている。

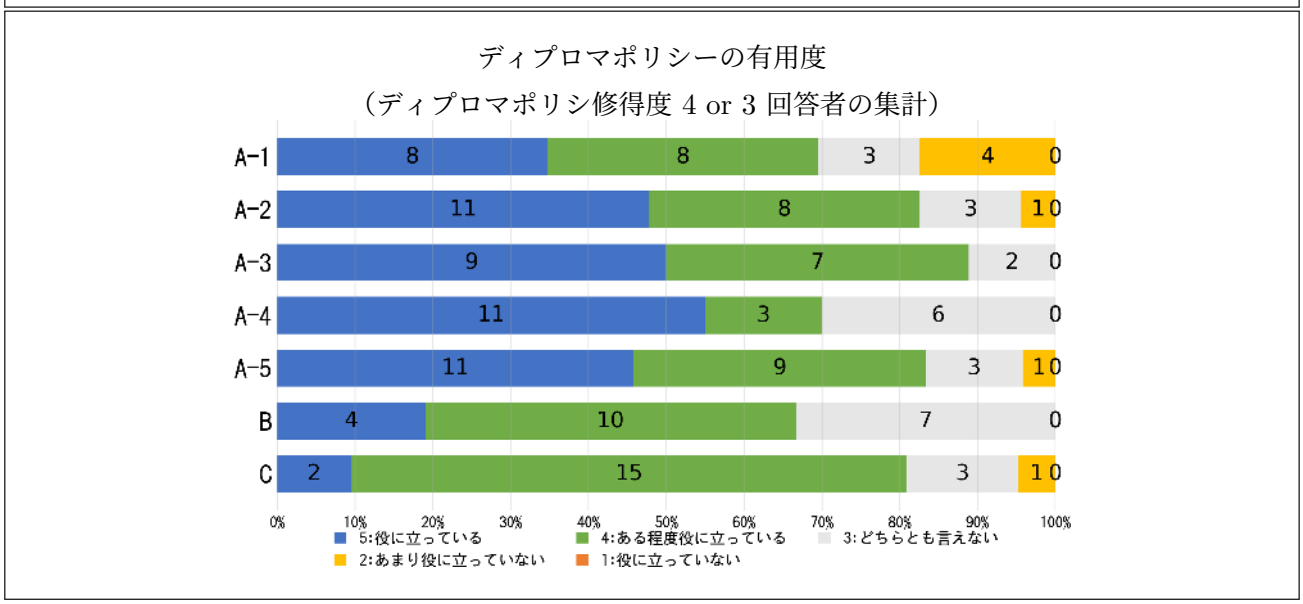
B 土木環境工学のどの分野でも活躍できるための基礎能力を身につけている：自然との調和を図りつつ生活・経済・文化・安全・地域を支える社会基盤を計画・設計・管理・評価する上で必要な、計画学系、建設材料工学系、構造工学系、地盤工学系、水理・水工学系、水処理・環境工学系の専門能力を身につけている。

C 社会の要請を察知し、理解して適切な行動ができる：現代の土木環境工学が直面している国内的、国際的問題を理解し、社会の技術者への要請を察知し、技術者のあるべき方向性を理解して適切な行動ができる能力を身につけている。

３．社会環境システム工学科卒業生のアンケート結果







４．社会環境システム工学科のアンケート結果の評価

卒業生 28 名から回答があった。回答のあった業種は主に建設業、公務員、コンサルタントであり、おおむね本学科の就職先が反映されている。ディプロマポリシーの習得度は、A-3 以外はいずれの項目も「身についた」、「やや身についた」が 70 %以上であり、問題はない。A-3 は自己学習能力の向上に関する習得度であり、やや低かった。ディプロマポリシーの有用度は、「身についた」、「やや身についた」の割合は 50～70 %であった。土木や環境の分野は多岐にわたるため、就職先によってはあまり使われない知識があったことが理由として考えられた。特に、就職後 4 年目では、まだ包括的な業務に携わる機会が少ないため、大学で学んだ知識を十分に活かしきれていない可能性がある。以上より、卒業生は、おおむね本学科で教育した専門的内容は身についたと判断しており、ディプロマポリシーが役立つものとして認識されていた。今後も継続して本プログラムのポリシーに基づく教育を実践してしていくことが求められる。

●環境ロボティクス学科

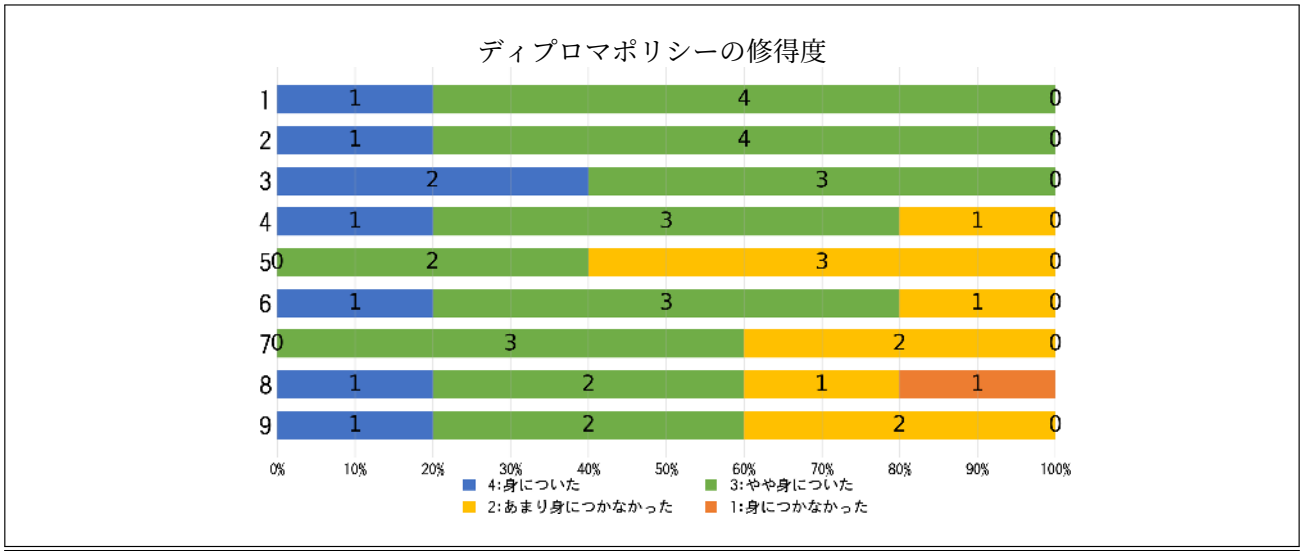
１．環境ロボティクス学科卒業生の業種別回答者数

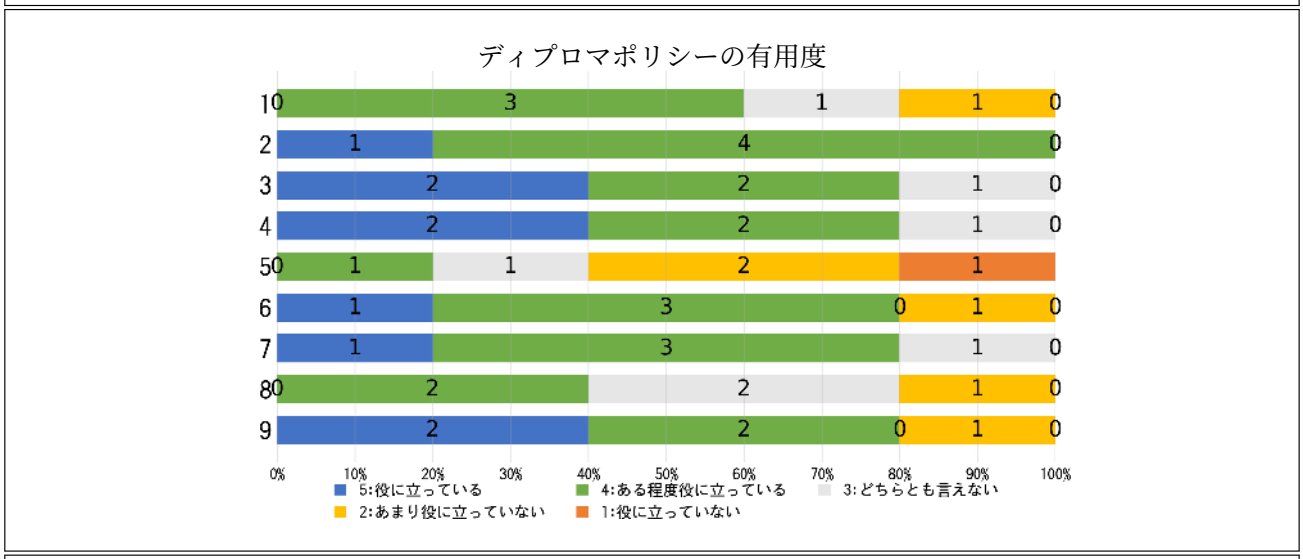
業種名	回答数	割合 (%)
8　電子部品・デバイス・電子回路製造業	1	20.0
9　電気・情報通信機械器具製造業	1	20.0
10　輸送用機械器具製造業	1	20.0
13　情報通信業	1	20.0
24　その他	1	20.0
Total	5	100.0

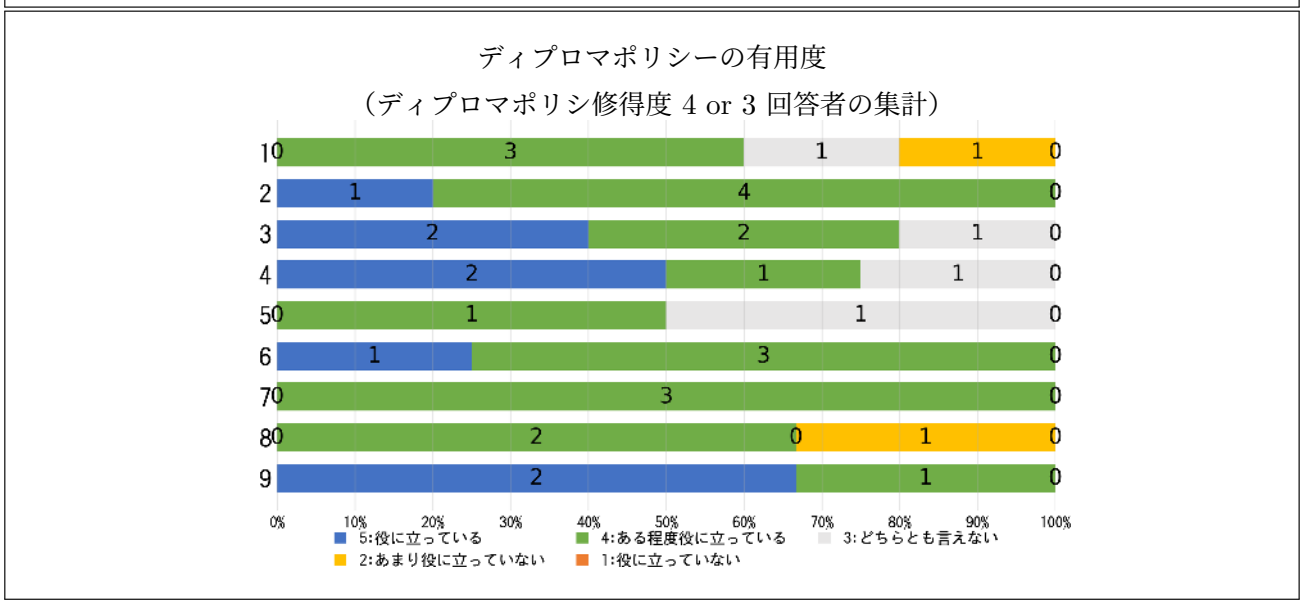
２．環境ロボティクス学科のディプロマポリシー

1 多面的視野：広い視野から多面的に物事を考えることができる。
2 倫理規範：社会における技術者の役割や使命を理解し、技術者として必要な倫理や規範を判断することができる。
3 チームワーク力：与えられた課題を達成する過程において、グループ討論を通じて得られるチームワーク力（リーダシップ、協調性）を発揮できる。
4 自律性・継続性：課題や問題に対して、自律的、継続的に取り組むことができる。
5 言語リテラシー：相手に自分の考えを理解してもらえる外国語を含むコミュニケーションを実践できる。
6 情報リテラシー：多様な情報を収集し、数量的スキルに基づいて分析し、効果的に活用することができる。
7 工学デザイン能力：与えられた課題を達成する過程において、自ら問題を発見、整理、解決する基礎能力と工学デザイン能力を活用できる。
8 環境及び地域の理解：環境及び地域に関する知識を理解できる。
9 専門領域の基礎知識：数学、機械、電気電子、情報、化学などの専門領域の基礎知識を習得し、それを活用できる。

３．環境ロボティクス学科卒業生のアンケート結果







４．環境ロボティクス学科のアンケート結果の評価

卒業生のアンケート結果より、「チームワーク力」、「自律性・継続性」は有用度が高いとの回答を得ている。特に、「チームワーク力」に関しては昨年度のアンケート結果でも高いと評価となっていることより、学部関連科目の教育成果を示している。ディプロマポリシーの全体の中では、「言語リテラシー」が修得度、有用度に関しても低い評価であった。

本アンケートの回答職種は、「電子部品・デバイス・電子回路製造業」「電気・情報通信機械器具製造業」「輸送用機械器具製造業」「情報通信業」等であり、多様な分野へ卒業生が就職していることがわかる。このことは、環境ロボティクス学科の特徴である分野融合教育の成果であり、多様な分野へ工学系人材を輩出していることを示す実績である。

●機械設計システム工学科

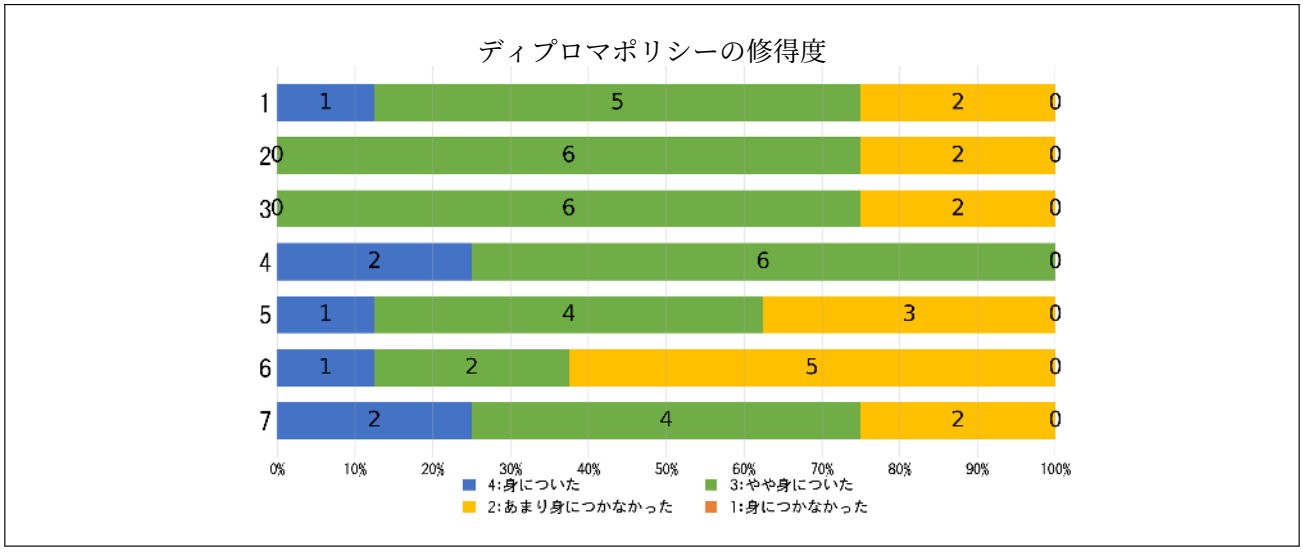
１．機械設計システム工学科卒業生の業種別回答者数

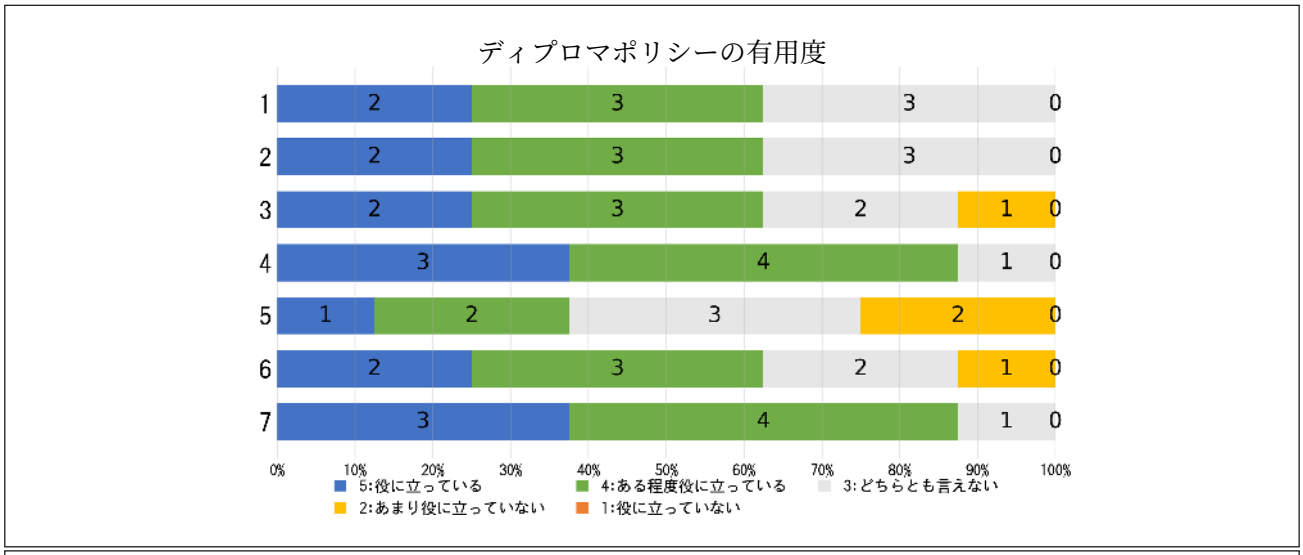
業種名	回答数	割合 (%)
1　建設業	1	12.5
7　はん用・生産用・業務用機械器具製造業	2	25.0
9　電気・情報通信機械器具製造業	1	12.5
10　輸送用機械器具製造業	1	12.5
11　その他の製造業	2	25.0
15　卸売業	1	12.5
Total	8	100.0

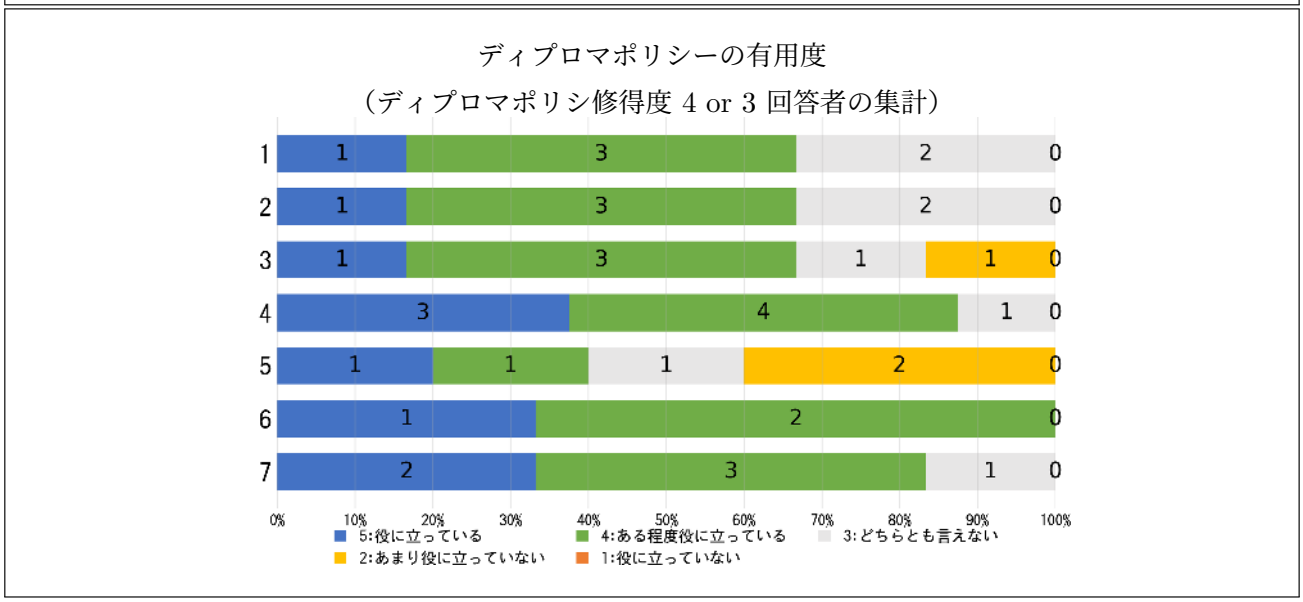
２．機械設計システム工学科のディプロマポリシー

1 P(Plan)　社会の要求や制約に応えるため、自主的に計画して、それを継続的に実行できる能力
2 H(Harmony)　人と機械との共存や機械と自然との調和を考えるための能力
3 O(Obligation)　社会秩序や自然環境保護に対する技術者の責務を考える能力
4 E(Engineering)　機械技術者としての工学の基礎および専門的知識
5 N(Nature)　自然環境を維持するために、資源とエネルギーの有効利用を考える能力
6 I(Idea)　自分のアイデアを実現できるデザイン能力およびそれを説明するコミュニケーション能力
7 X(eXamination)　得られた成果を吟味し、まとめる能力

３．機械設計システム工学科卒業生のアンケート結果







４．機械設計システム工学科のアンケート結果の評価

１）回答者の業種から見た評価

業種別の回答については、回答数は少なく卒業生の就職先業種別の人数割合を反映していないが、機械設計システム工学科卒業生の就職先の業種をカバーしている。

２）ディプロマポリシーについて

卒業生が評価するディプロマポリシーの修得度については、「I（Idea）自分のアイデアを実現できるデザイン能力およびそれを説明するコミュニケーション能力」でやや否定的な回答が多かったが、それ以外の項目については肯定的な回答であった。特に「E（Engineering）機械技術者としての工学の基礎および専門的知識」については評価が高く、工学の基礎および専門知識を十分修得したものと考えられる。ディプロマポリシーの有用度については、いずれも肯定的な回答が多く，特に，「E (Engineering)」と「X(eXamination) 得られた成果を吟味し，まとめる能力」については役に立っているという意見が多かった。また、修得度４または３を回答した卒業生は，全般的に有用度も高くなる傾向が見られる．

●電子物理工学科

１．電子物理工学科卒業生の業種別回答者数

業種名		回答数	割合 (%)
1	建設業	1	7.7
5	化学工業、石油・石炭製品製造業	1	7.7
8	電子部品・デバイス・電子回路製造業	3	23.1
9	電気・情報通信機械器具製造業	3	23.1
10	輸送用機械器具製造業	1	7.7
13	情報通信業	1	7.7
20	その他の専門・技術サービス業 (建設コンサルタントを含む)	1	7.7
22	国家公務員	1	7.7
24	その他	1	7.7
Total		13	100.0

２．電子物理工学科のディプロマポリシー

A-1 自然界や社会における問題を様々な立場から理解する能力を身につける。

A-2 社会における工学の役割や使命を理解し、技術者として必要な技術者倫理や情報倫理を身につける。

B-1 数学・物理学を中心とした工学基礎知識を習得する。

B-2 工学の基礎となる力学、電磁気学、物性物理学、量子力学、電気回路などに関する知識を習得する。

B-3 実験によって物理現象を確認するとともに、実験技法を修得する。

B-4 電子物性工学、物理計測工学に関わる基本原理を理解し、その応用能力を身につける。

C-1 自分の考えを論理的にまとめ、相手に文書やプレゼンテーションで正確に伝えると共に、相手の話している内容を理解する能力を身につける。

C-2 円滑な課題解決のためのチームワーク力を身につける。

C-3 工学的な内容について書かれた英語文献等を理解するための基礎的能力を身につける。

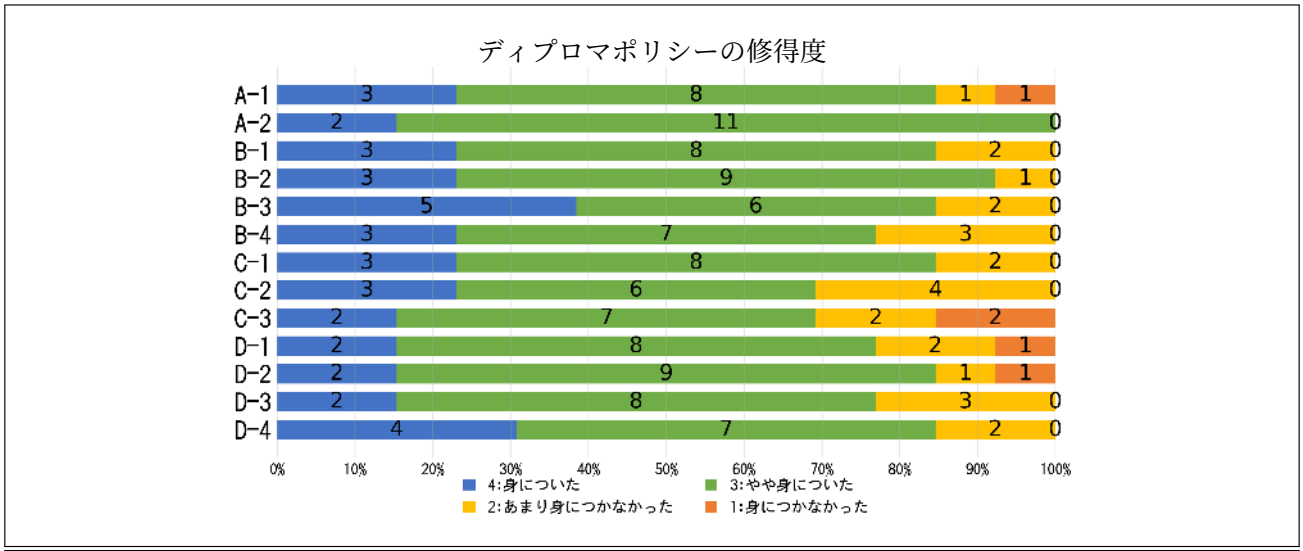
D-1 与えられた課題を達成する過程において、情報を収集、分析し自ら問題を発見し、その背後にある課題を見つけそれを整理する能力を身につける。

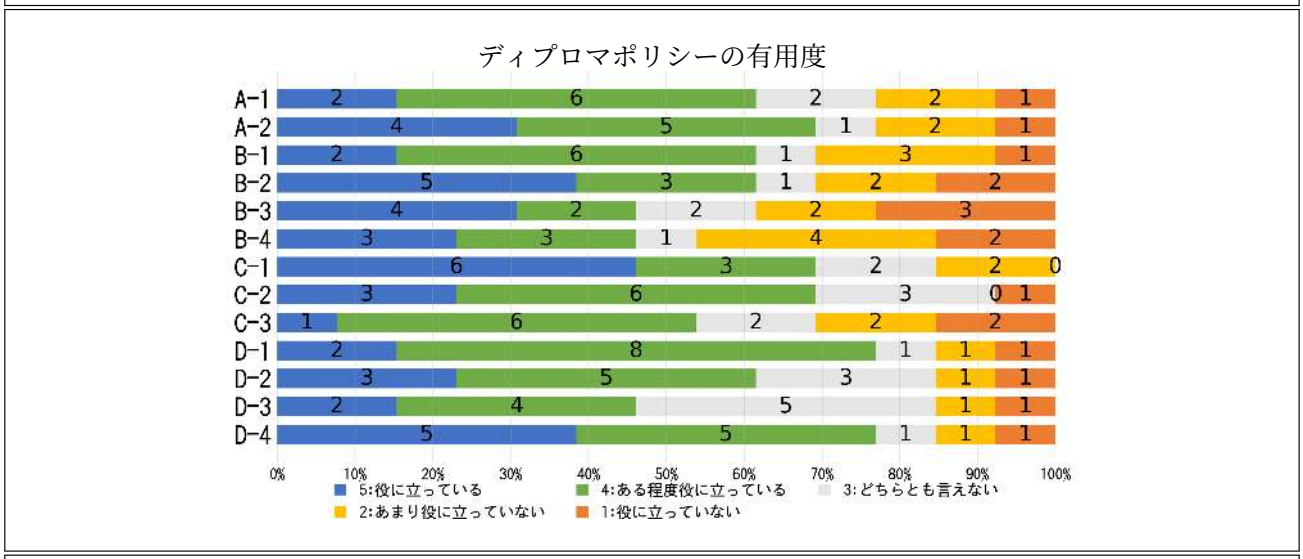
D-2 課題を論理的に考察し、解決できる能力を身につけ、その結果をまとめることができる。

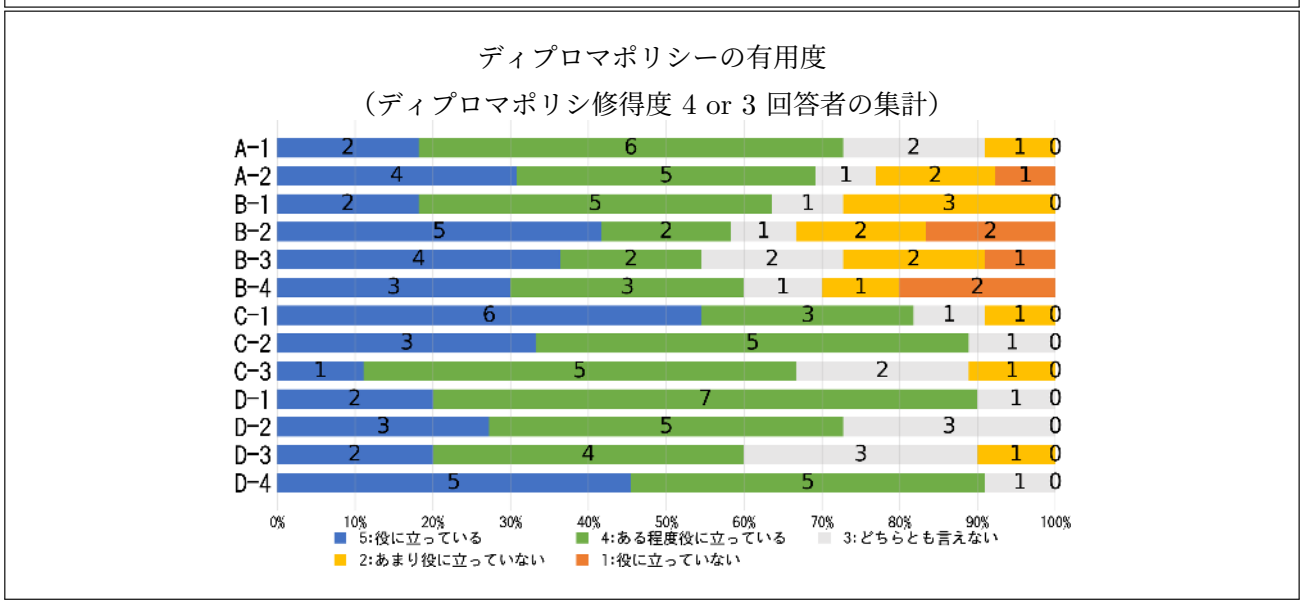
D-3 さまざまな条件を考慮して問題を解決するための仕組み（手順）を構築する能力を身につける。

D-4 自主的・継続的に課題に取り組む能力を身につける。

３．電子物理工学科卒業生のアンケート結果







４．電子物理工学科のアンケート結果の評価

１）卒業生の業種から見た評価

電子物理工学科の目指している業種に就職していると判断できる。

２）ディプロマポリシーについて

- B-3（実験によって物理現象を確認するとともに、実験技法を修得する）と D-4（自主的・継続的に課題に取り組む能力を身につける）について身についたと判断出来る。
- C-2（円滑な課題解決のためのチームワーク力を身につける）と C-3（工学的な内容について書かれた英語文献等を理解するための基礎的能力を身につける）については修得できなかったと判断できる。卒業研究では、個々のテーマについて研究する場合が多く、また卒業研究の１年間では基礎的能力を高めるには期間が短かったためと予想する。
- 有用度については、修得できていた D-4 と、ある程度修得できていた C-1（自分の考えを論理的にまとめ、相手に文書やプレゼンテーションで正確に伝えると共に、相手の話している内容を理解する能力を身につける）が高かった。
- B-3（実験によって物理現象を確認するとともに、実験技法を修得する）と B-4（電子物性工学、物理計測工学に関わる基本原理を理解し、その応用能力を身につける）の有用度が低いという回答がいくつかあるが、有用であるとの回答もほぼ同数ある。就職先での業務内容次第でこのような結果になったと思われる。

●電気システム工学科

１．電気システム工学科卒業生の業種別回答者数

業種名	回答数	割合 (%)
8　電子部品・デバイス・電子回路製造業	3	42.9
9　電気・情報通信機械器具製造業	1	14.3
10　輸送用機械器具製造業	1	14.3
12　電気・ガス・熱供給・水道業	1	14.3
13　情報通信業	1	14.3
Total	7	100.0

２．電気システム工学科のディプロマポリシー

A-1 広い視野から多面的に物事を考える能力を身につける。

A-2 自然科学・数学を中心とした基礎知識を習得する。

A-3 電気システム工学の基礎となる電磁気学、電気回路などの知識を習得する。

B 習得した基礎知識を電気エネルギー、電子回路、制御、情報、通信などの専門領域において応用できる能力を身につける。

C-1 与えられた課題を達成する過程において、自ら問題を発見、整理する基礎能力を身につける。

C-2 自主的およびチ－ムで問題・課題を解決するための手段を計画・実行し、実験やシミュレーション及びその過程における考察・議論を経て、問題を解決する能力を身につける。

C-3 解決した問題点を専門的な知識や技術の観点から総合的に考察できる能力を身につける。

D-1 日本語で論理的な記述ができる能力を身につける。

D-2 相手に対して自分の考えを理解してもらえるプレゼンテーションの技術を習得する。

D-3 相手の話している内容を理解し、要点をまとめる能力を身につける。

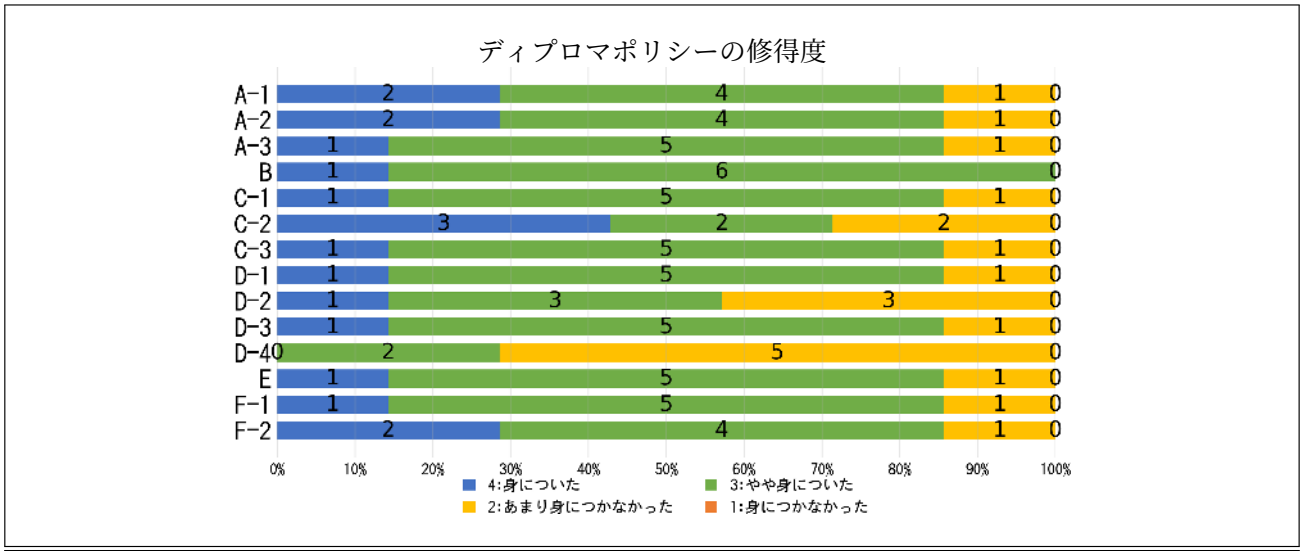
D-4 国際的に標準となっている英語の文献や資料を読み、理解できる能力を身につける。

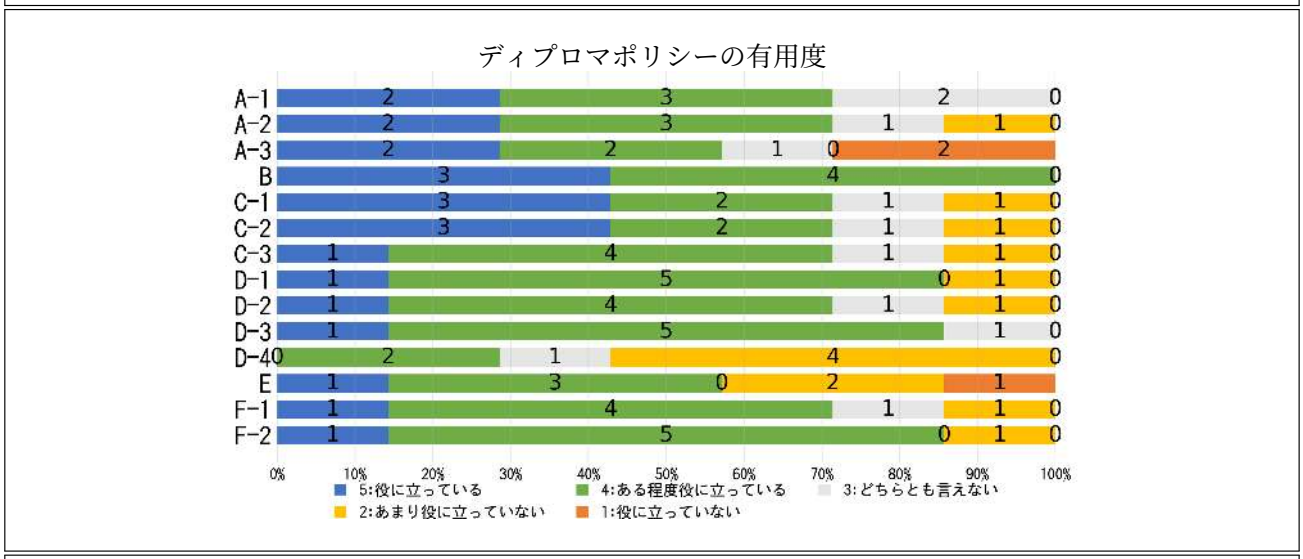
E 社会における電気システム工学の役割や使命を理解し、技術者として必要な倫理や規範を判断できる能力を身につける。

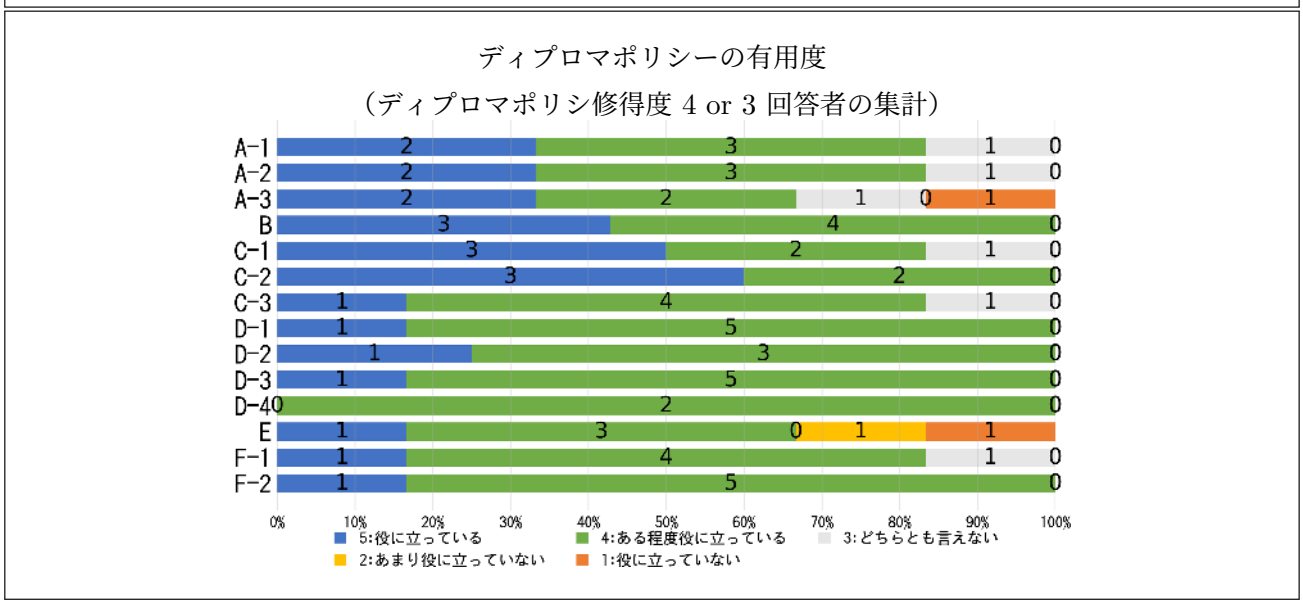
F-1 課題や問題に対して、自律的、継続的に取り組むことができる能力を身につける。

F-2 問題解決するための文献調査・収集・整理する能力を身につける。

３．電気システム工学科卒業生のアンケート結果







４．電気システム工学科のアンケート結果の評価

１）卒業生の業種から見た評価

回答者数が多くないが、学生は電気システム工学科の目指している分野に就職している。具体的には半導体作製企業、電気通信情報起業、電力会社、電気機器製造企業である。

２）ディプロマポリシーについて

ディプロマポリシーの修得度については、全ての項目について概ね身についている（「４身についている」と「３やや身についている」の合計）とする割合が高かった。特に、B が高く、電気エネルギー、電子回路、制御、情報、通信などの専門領域において応用できる能力を身につけていると評価している。卒業研究の他、電気システム工学プロジェクト実験や電気システム工学課題演習において、課題探求及び課題解決能力を向上させる教育の成果がでているものと考える。

一方、D-4 の英語の文献や資料を読み、理解できる能力を身につける項目については、身につかなかったとの回答が寄せられている。これは毎年の傾向である。入学時から英語を苦手とする学生が多いことが大きな要因と思われるが、英語文献の読み合わせの時間を特別に設けるなどの工夫をしているものの大きな成果が得られていないと考える。

ディプロマポリシーの有用度においては、D-4 の英語に関して有用度がないとの回答が寄せられている。上述の英語を苦手とする学生が、就職先においても積極的な関りがないことが反映されているのかもしれない。

以上の結果から、卒業生は電気システム工学科が掲げたディプロマポリシーを身につけていると判断できる。

●情報システム工学科

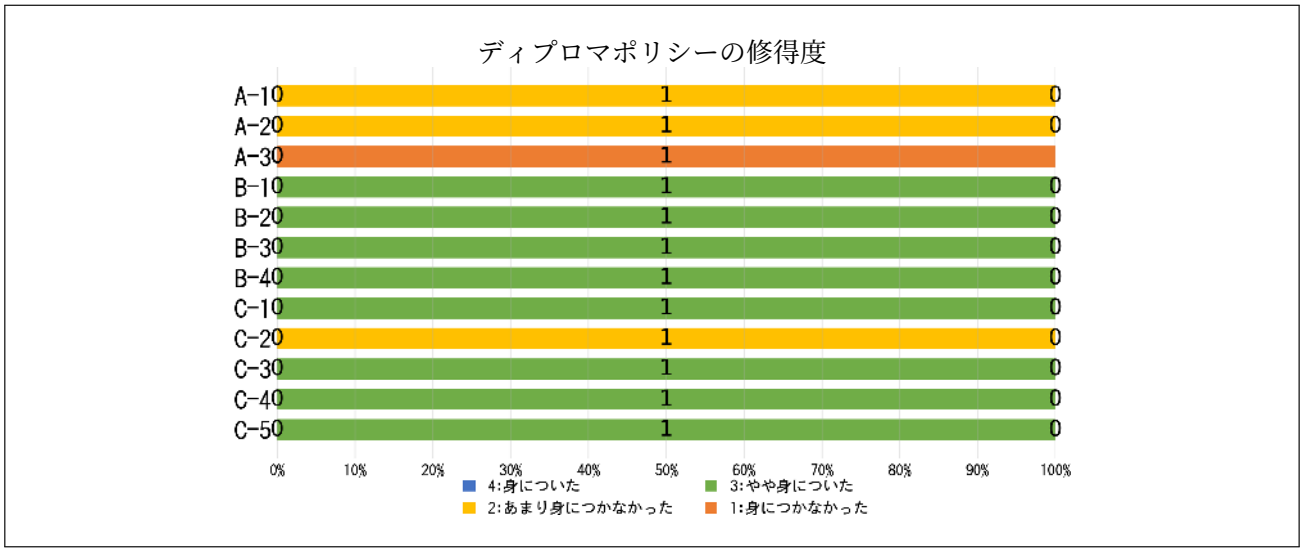
１．情報システム工学科卒業生の業種別回答者数

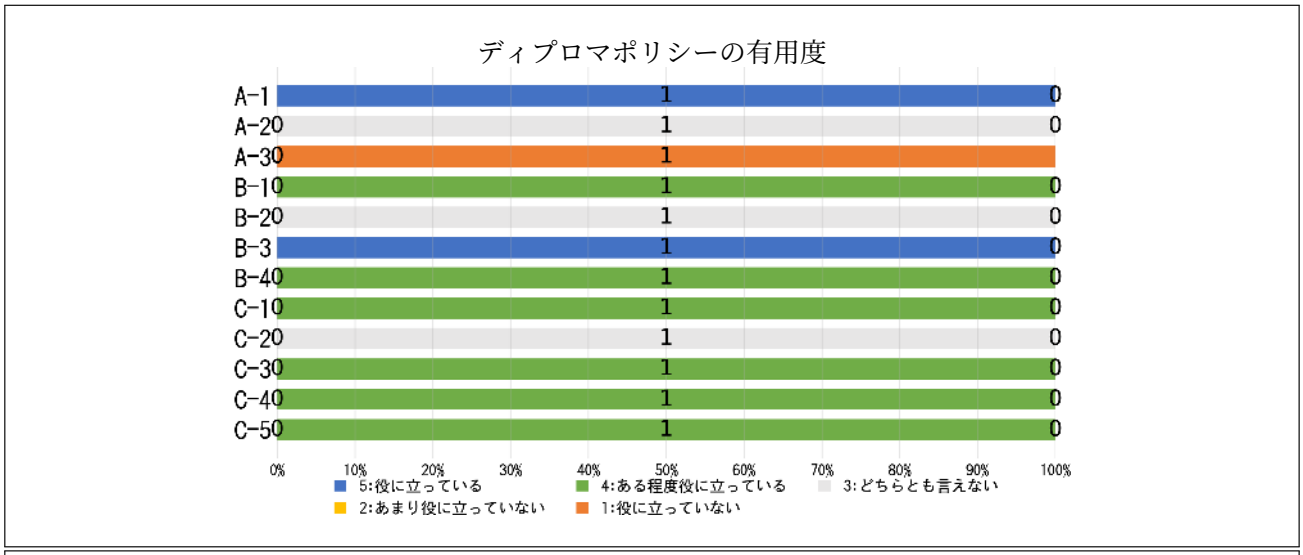
業種名	回答数	割合 (%)
13　情報通信業	1	100.0
Total	1	100.0

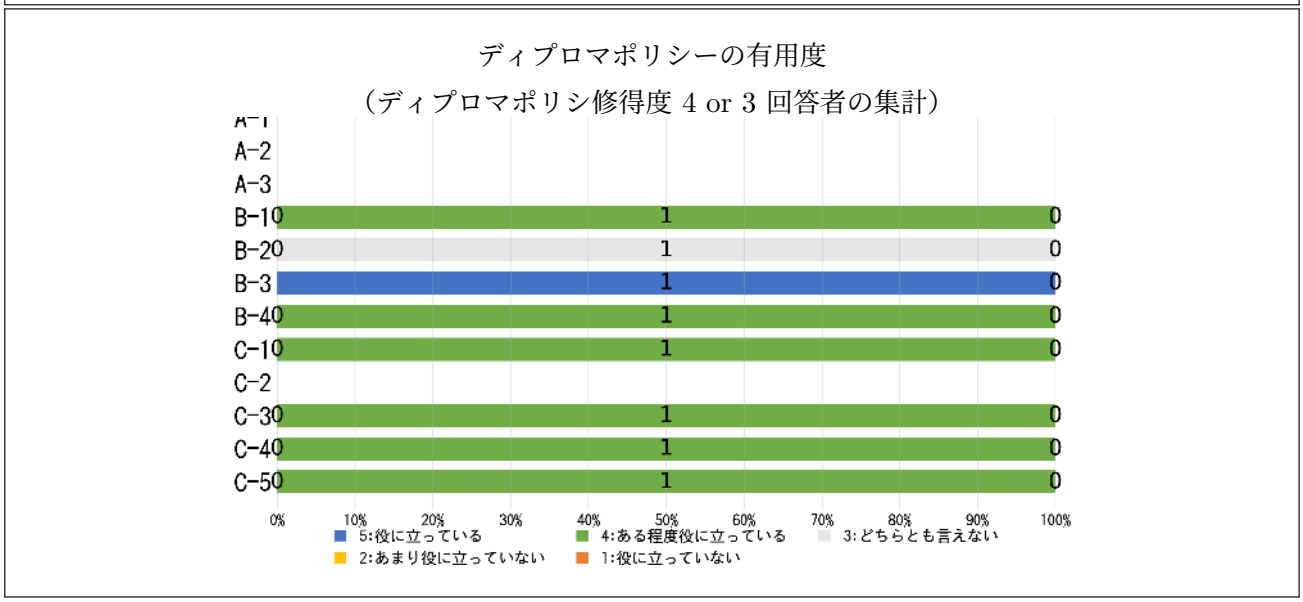
２．情報システム工学科のディプロマポリシー

A-1 問題を環境、人間、文化、社会、地域、国際関係などの側面から多面的にとらえることができる。
A-2 工学技術者が社会に及ぼす影響や技術者としての倫理的責任を理解できる。
A-3 数学、物理、化学、生命科学などの工学者としての基礎知識を習得し、それを応用することができる。
B-1 数学及び情報科学の理論の基礎を理解し、情報工学の様々な問題に応用することができる。
B-2 計算機システムの構成や動作に関する知識を習得し、ソフトウェア開発に応用することができる。
B-3 問題を解決するために、既存のアプリケーションソフトを利用できかつ自らプログラムを作成することができる。
B-4 ユーザの要求を分析し、要求を満たす情報システムをデザインし、実装し、評価することができる。
C-1 自分の考えを伝え相手の考えを理解するための、日本語による論理的な記述、プレゼンテーション及び討議を行うことができる。
C-2 英語による情報を理解し、基礎的なコミュニケーションを行うことができる。
C-3 情報技術の進化に対応していくために、主体的かつ継続的な学習の必要性を理解できる。
C-4 与えられた制約の下で課題を解決するために、計画的にその課題に取り組むことができる。
C-5 チームとして目標を共有し、コミュニケーションを図りつつ問題解決に取り組むことができる。

３．情報システム工学科卒業生のアンケート結果







４．情報システム工学科のアンケート結果の評価

１）卒業生の業種から見た評価

情報通信業で働いている卒業生 1 名から、アンケートに対する回答があった。情報システム工学科の目指している分野に就職をしているが、回答数が少ないため、学科のカリキュラム設計方針に問題はない、と断言することまではできない。

２）ディプロマポリシーについて

修得度については、A-3（数学、物理、化学、生命科学などの工学者としての基礎知識を習得し、それを応用することができる）について、身につかなかった、という回答があり、これは残念である。アンケートに対する回答者数が 1 名であったため、昨年度の調査結果からはこのような回答の傾向はみられなかったことから、学科のカリキュラム設計方針に問題はない、と考えたい。C-2（英語による情報を理解し、基礎的なコミュニケーションを行うことができる）については「あまり身につかなかった」と回答があり、これについては昨年度の調査結果に同様な傾向がみられた。

現在の情報システム工学科のカリキュラム設計には特に問題はないと考えるが、サンプル数が少ないのが問題である。アンケート回答者数を増やせるよう、なんらかの対策が必要であると考える。

工学研究科

●工学研究科全体

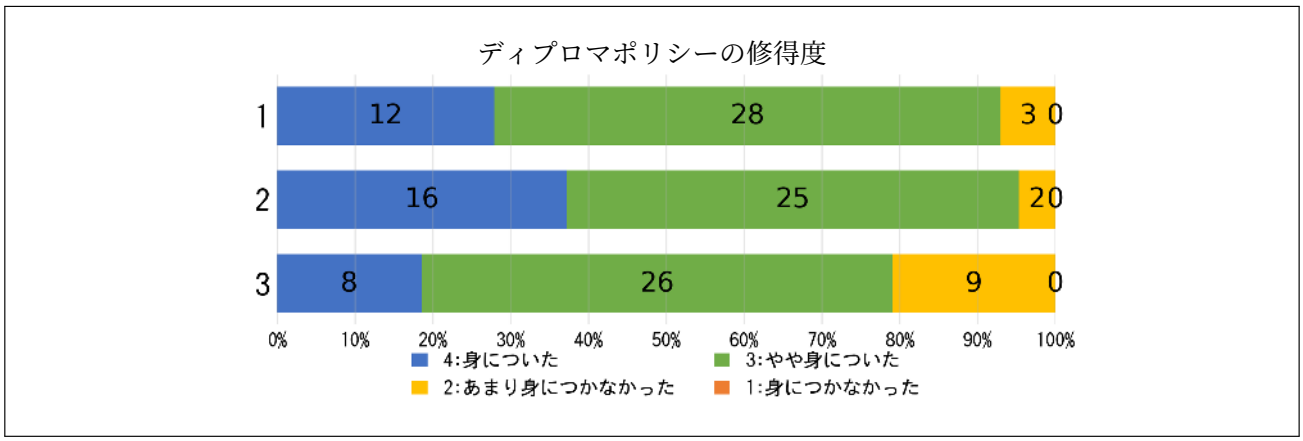
１．工学研究科全体の修了生の業種別回答者数

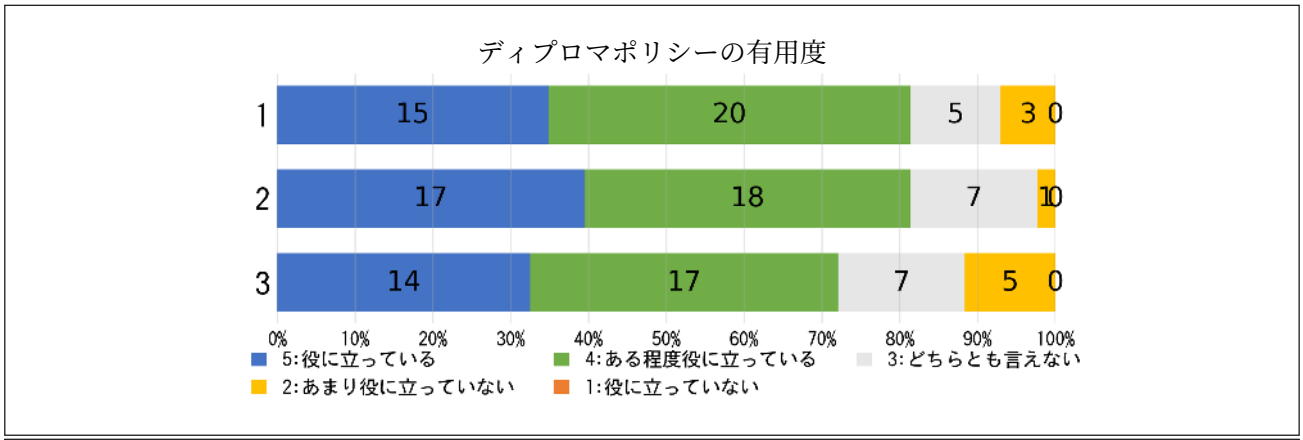
業種名		回答数	割合 (%)
1	建設業	6	14.0
3	繊維工業	1	2.3
5	化学工業、石油・石炭製品製造業	1	2.3
7	はん用・生産用・業務用機械器具製造業	1	2.3
8	電子部品・デバイス・電子回路製造業	5	11.6
9	電気・情報通信機械器具製造業	4	9.3
10	輸送用機械器具製造業	4	9.3
11	その他の製造業	1	2.3
12	電気・ガス・熱供給・水道業	2	4.7
13	情報通信業	4	9.3
15	卸売業	1	2.3
20	その他の専門・技術サービス業 (建設コンサルタントを含む)	2	4.7
21	学校教育	1	2.3
23	地方法務員	4	9.3
24	その他	6	14.0
Total		43	100.0

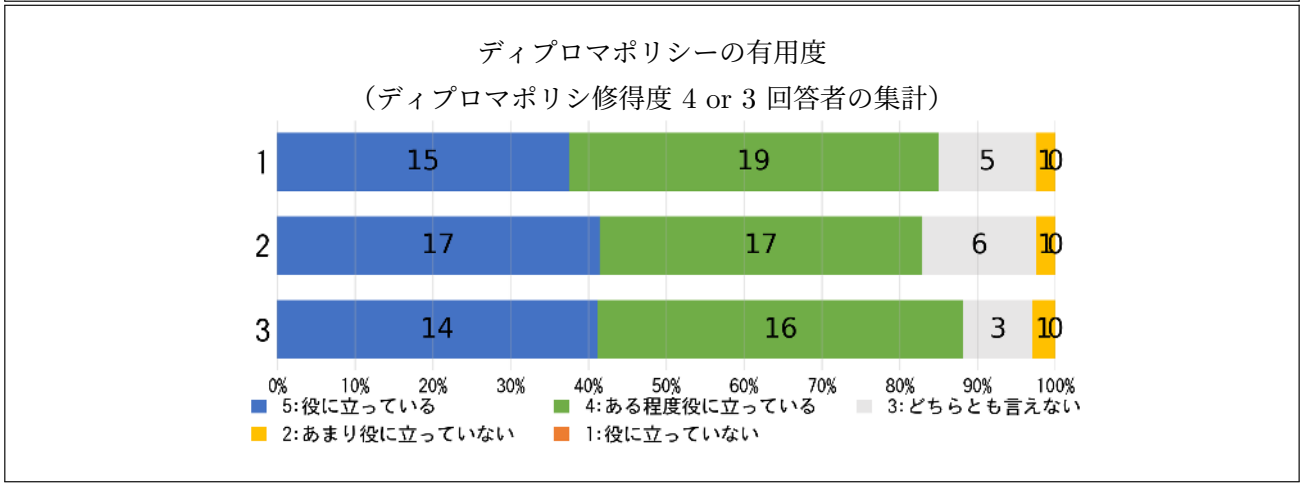
２．工学研究科全体のディプロマポリシー

1 工学分野の高度専門知識を修得して応用できる能力
2 自ら課題を探求し、その解決に向けて高度専門知識を活用し主体的に考える能力
3 研究開発を通じて必要となる日本語や英語によるコミュニケーション能力

３．工学研究科全体の修了生のアンケート結果







４．工学研究科全体のアンケート結果の評価

昨年度は 30 件、今年度は 43 件の回答があった。業種別の回答数の分布は、回答が得られた分野に偏りがあるため、実際の就職先の分布とは異なると考えられるが、工学分野の幅広い業種に就職しており、問題はないと考えられる。

ディプロマポリシーの修得度、有用度については、昨年度は「1: 身につかなかった」「1: 役に立っていない」という回答が数件あったが、今年度はそのような回答はなかった。いずれの項目でもポジティブな回答が 80 %程度を越えており、工学研究科のディプロマポリシーに大きな問題はみられない。相対的には、「DP3: 日本語や英語によるコミュニケーション能力」の修得度が低い傾向が見られる。

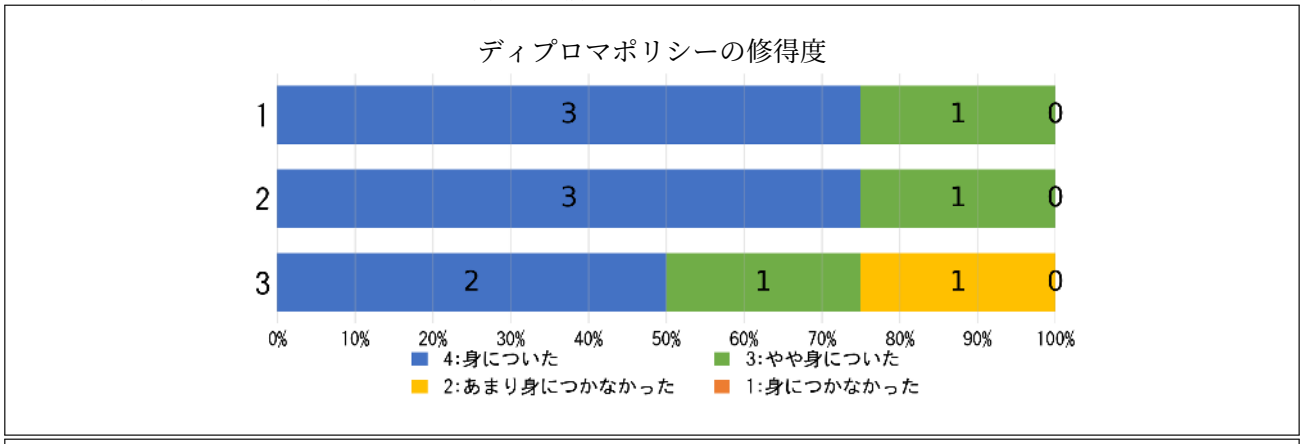
●環境応用化学分野

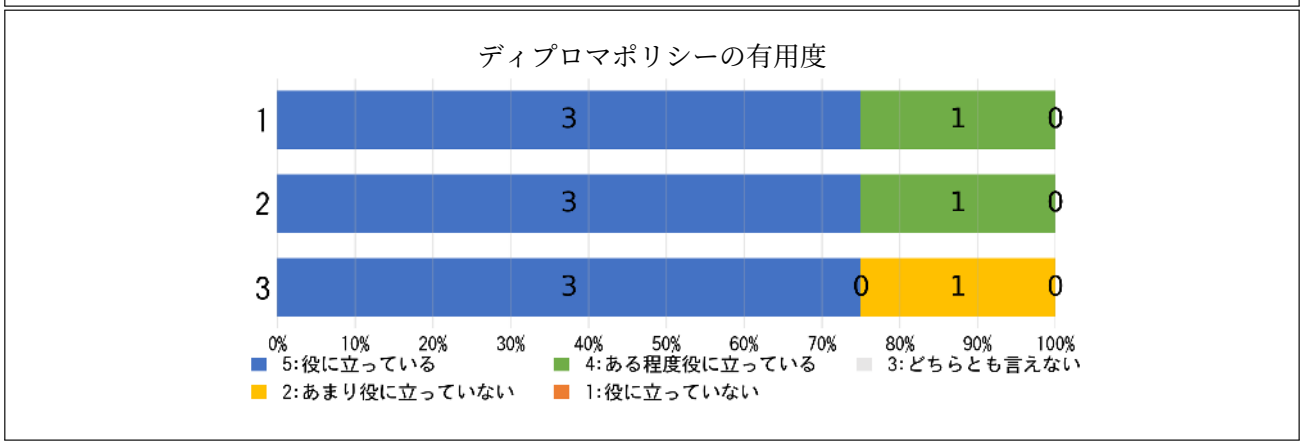
１．環境応用化学分野修了生の業種別回答者数

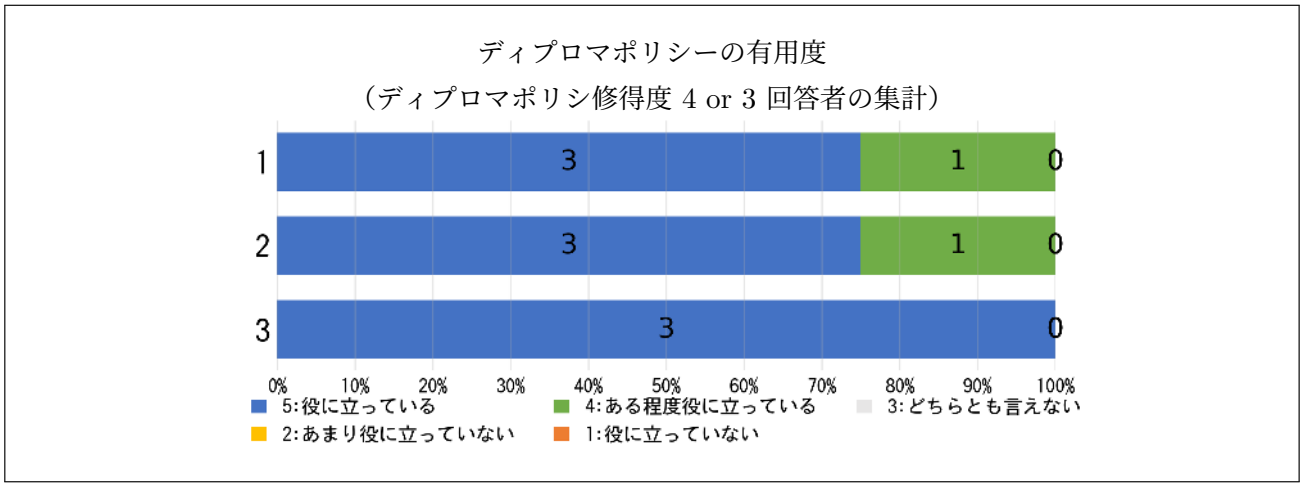
業種名	回答数	割合 (%)
3　繊維工業	1	25.0
12　電気・ガス・熱供給・水道業	1	25.0
21　学校教育	1	25.0
24　その他	1	25.0
Total	4	100.0

２．環境応用化学分野修了生のアンケート結果

1 工学分野の高度専門知識を修得して応用できる能力
2 自ら課題を探求し、その解決に向けて高度専門知識を活用し主体的に考える能力
3 研究開発を通じて必要となる日本語や英語によるコミュニケーション能力







３．環境応用化学分野のアンケート結果の評価

専門知識（1）および課題解決能力（2）についての習得度と有用性は自己評価が高いと判断できる。一方で日本語や英語によるコミュニケーション能力（3）についての評価が比較的低い。学部と同じく、語学教育の習得について修了生は課題を感じていると見受けられる。

●社会環境システム工学分野

１．社会環境システム工学分野修了生の業種別回答者数

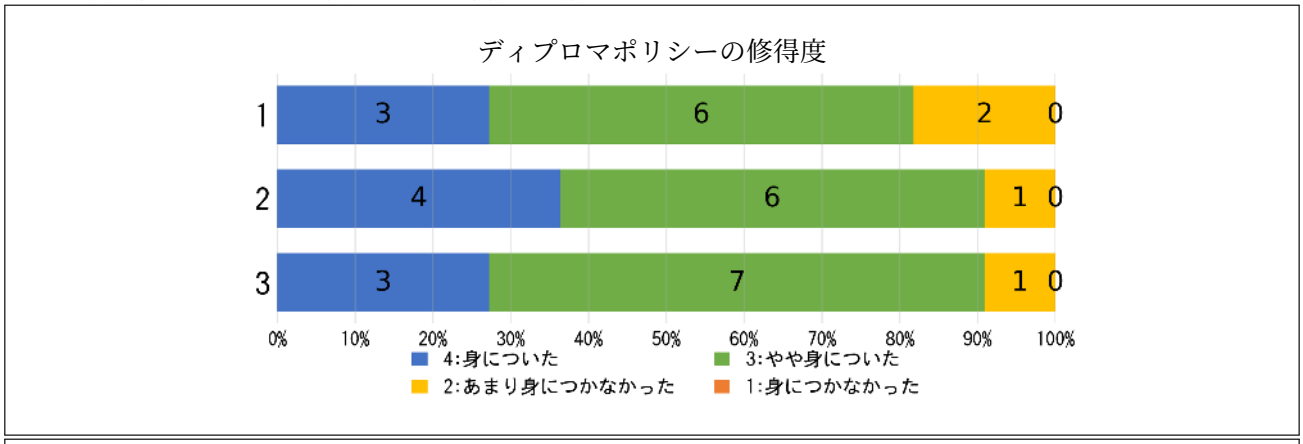
業種名	回答数	割合 (%)
1　建設業	5	45.5
20　その他の専門・技術サービス業 (建設コンサルタントを含む)	1	9.1
23　地方法務員	4	36.4
24　その他	1	9.1
Total	11	100.0

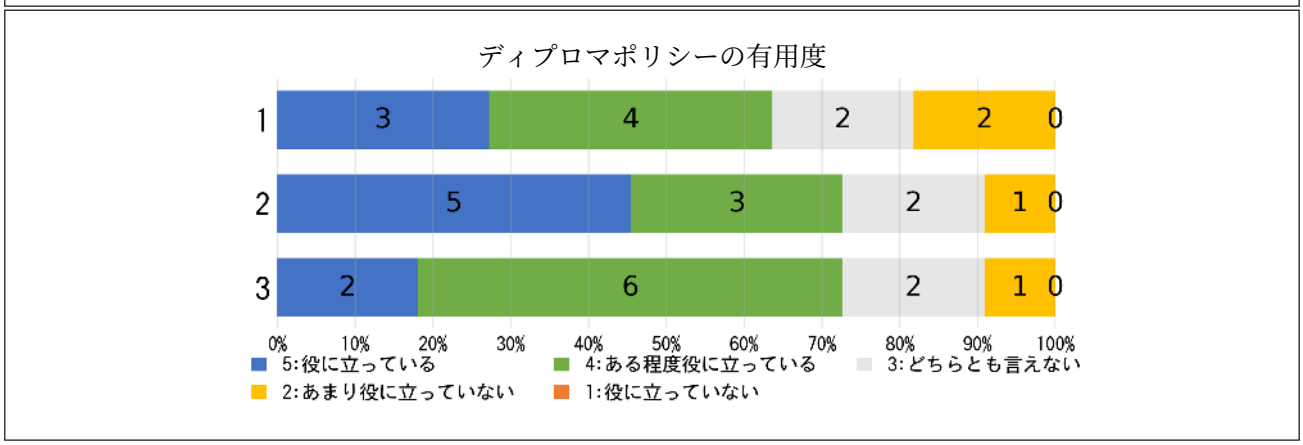
２．社会環境システム工学分野修了生のアンケート結果

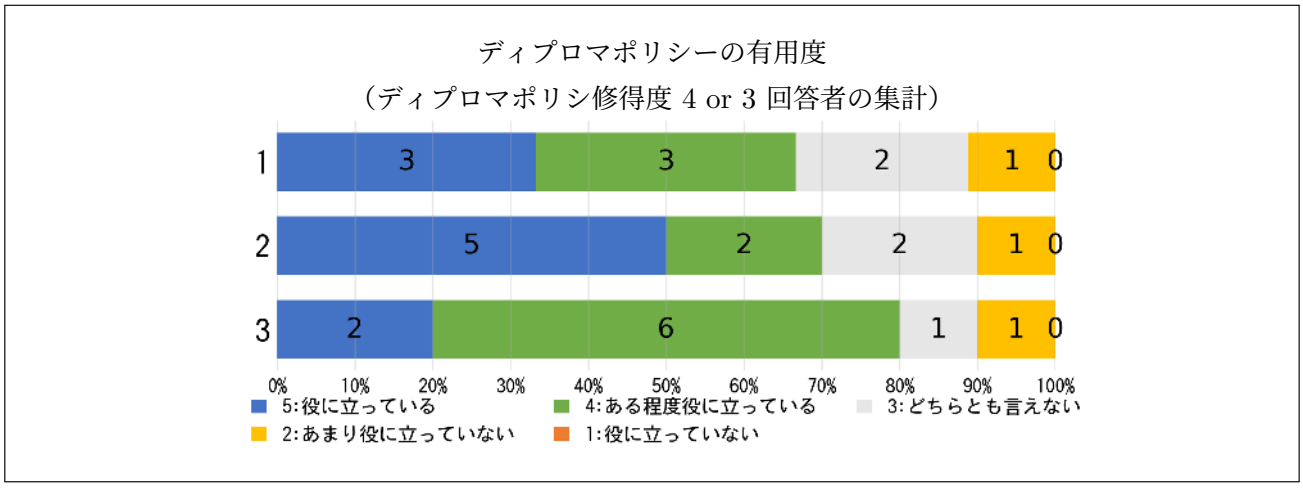
1 工学分野の高度専門知識を修得して応用できる能力

2 自ら課題を探求し、その解決に向けて高度専門知識を活用し主体的に考える能力

3 研究開発を通じて必要となる日本語や英語によるコミュニケーション能力







３．社会環境システム工学分野のアンケート結果の評価

修了生 11 名から回答があった。ディプロマポリシーの修得度は、いずれの項目も「身についた」、「やや身についた」が 80 %以上であり、問題はない。ディプロマポリシーの有用度は、「身についた」、「やや身についた」の割合は 60〜70 %であり概ね問題ないと考えられた。学部生と同様に、土木分野は内容が多岐にわたるため、就職 4 年目では十分に活用できていないと感じている修了生がある程度いることがうかがえた。以上より、設定されたディプロマポリシーの有用性はおおむね問題ないと判断できる。

●環境ロボティクス分野

１．環境ロボティクス分野修了生の業種別回答者数

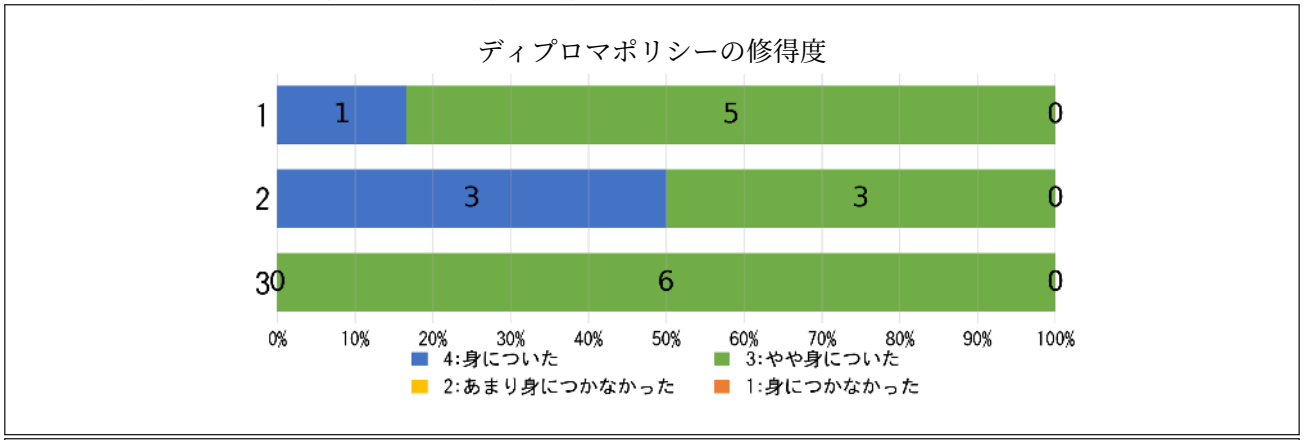
業種名	回答数	割合 (%)
8　電子部品・デバイス・電子回路製造業	1	16.7
9　電気・情報通信機械器具製造業	1	16.7
10　輸送用機械器具製造業	1	16.7
13　情報通信業	1	16.7
24　その他	2	33.3
Total	6	100.0

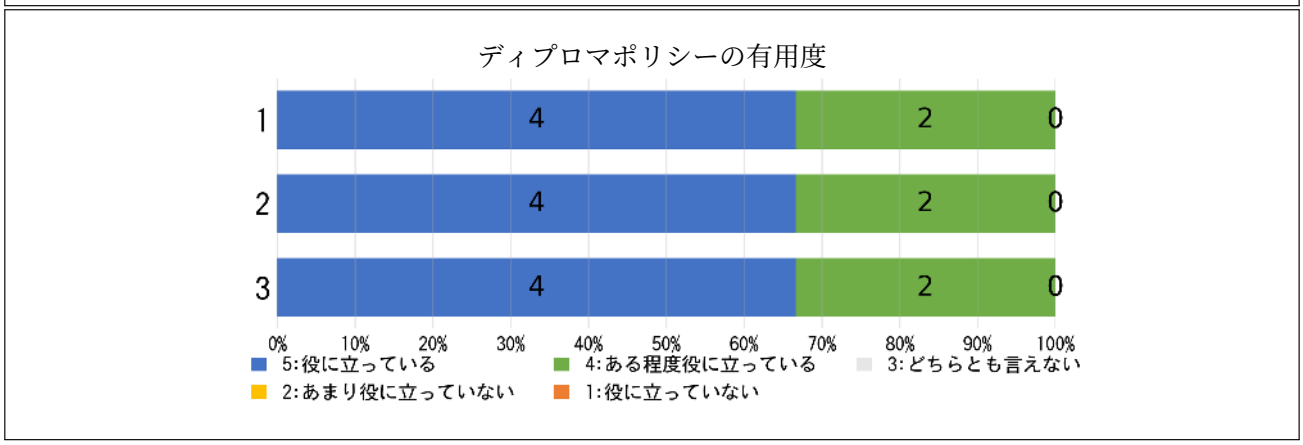
２．環境ロボティクス分野修了生のアンケート結果

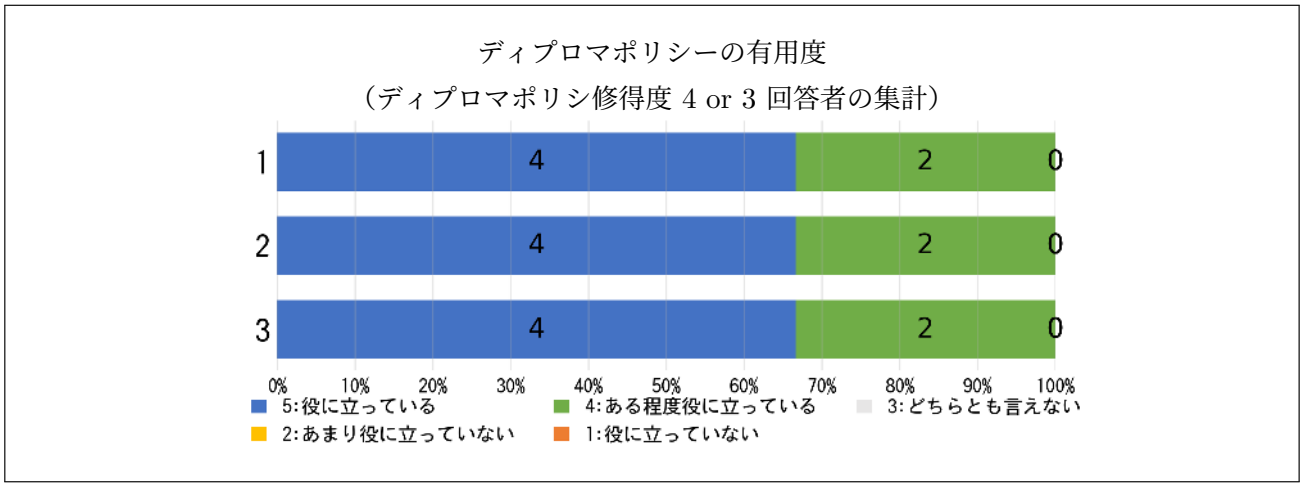
1 工学分野の高度専門知識を修得して応用できる能力

2 自ら課題を探求し、その解決に向けて高度専門知識を活用し主体的に考える能力

3 研究開発を通じて必要となる日本語や英語によるコミュニケーション能力







３．環境ロボティクス分野のアンケート結果の評価

アンケート結果より、「研究開発を通じて必要となる日本語や英語によるコミュニケーション能力」の修得度が他のディプロマポリシーより低めではあるが、全体的に身についているとの評価を頂いた。環境ロボティクス学科の卒業生からのアンケート結果と合わせて、英語を含むコミュニケーション力の就職してからの重要性を、卒業生、修了生からのアンケート結果から再認識した。

●機械設計システム工学分野

１．機械設計システム工学分野修了生の業種別回答者数

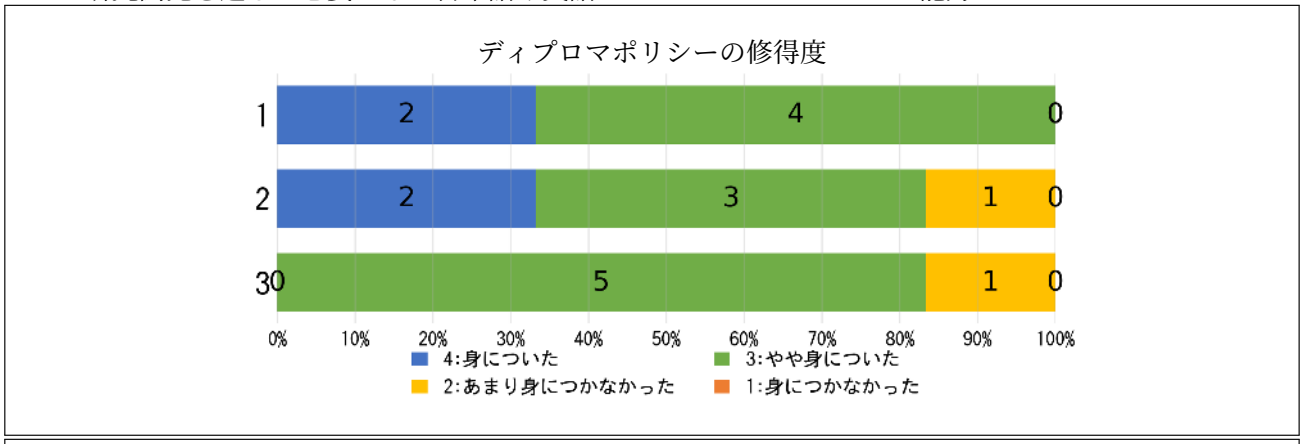
業種名	回答数	割合 (%)
1　建設業	1	16.7
7　はん用・生産用・業務用機械器具製造業	1	16.7
9　電気・情報通信機械器具製造業	1	16.7
10　輸送用機械器具製造業	1	16.7
11　その他の製造業	1	16.7
15　卸売業	1	16.7
Total	6	100.0

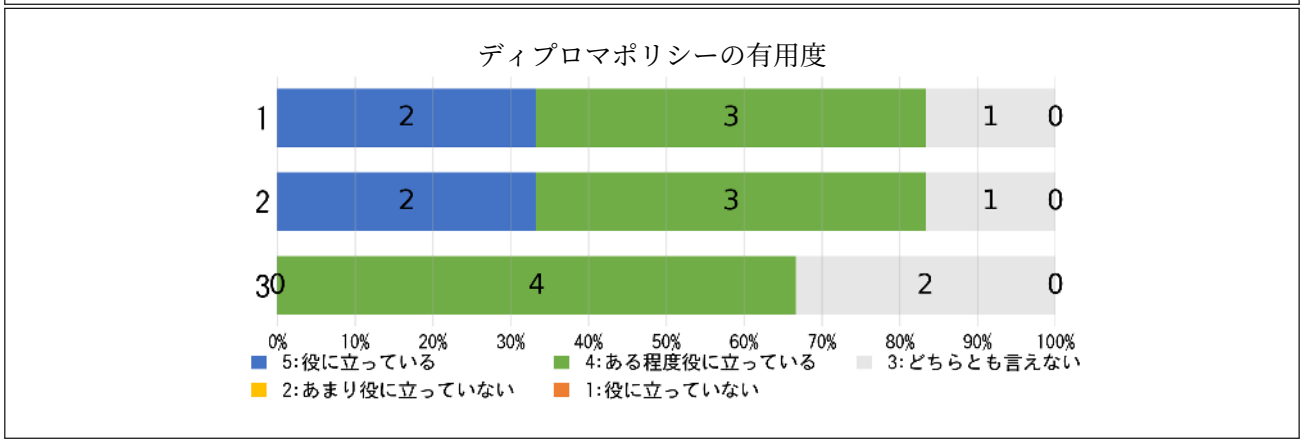
２．機械設計システム工学分野修了生のアンケート結果

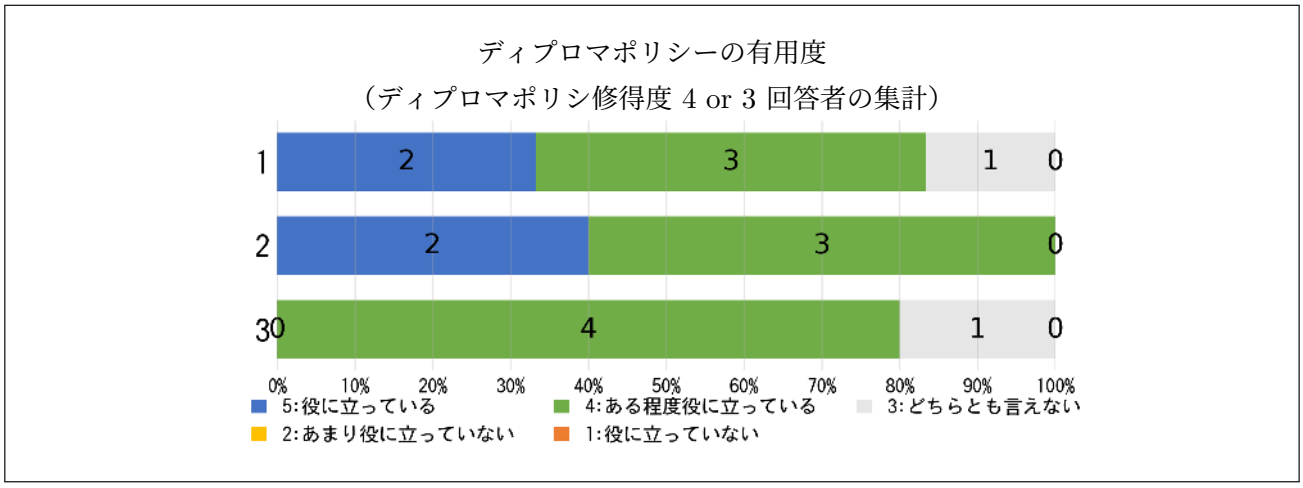
1 工学分野の高度専門知識を修得して応用できる能力

2 自ら課題を探求し、その解決に向けて高度専門知識を活用し主体的に考える能力

3 研究開発を通じて必要となる日本語や英語によるコミュニケーション能力







３．機械設計システム工学分野のアンケート結果の評価

１）回答者からの業種から見た評価

業種別の回答については、回答数は少なく修了生の就職先業種別の人数割合を反映していないが、機械設計システム工学分野修了生の就職先の業種をカバーしている。

２）ディプロマポリシーについて

修了生が評価するディプロマポリシーの修得度については、すべて肯定的であり、工学分野の高度専門知識を修得し応用できる能力や課題探求能力を身に付けていると、多くの修了生が自己評価してる。ディプロマポリシーの有用度についても、修得度と同様の傾向が見られすべて肯定的である。また、多くの修了生は、修士課程で修得した高度専門知識やコミュニケーション能力を就職先で活用しているものと考えられる。

●電子物理工学分野

１．電子物理工学分野修了生の業種別回答者数

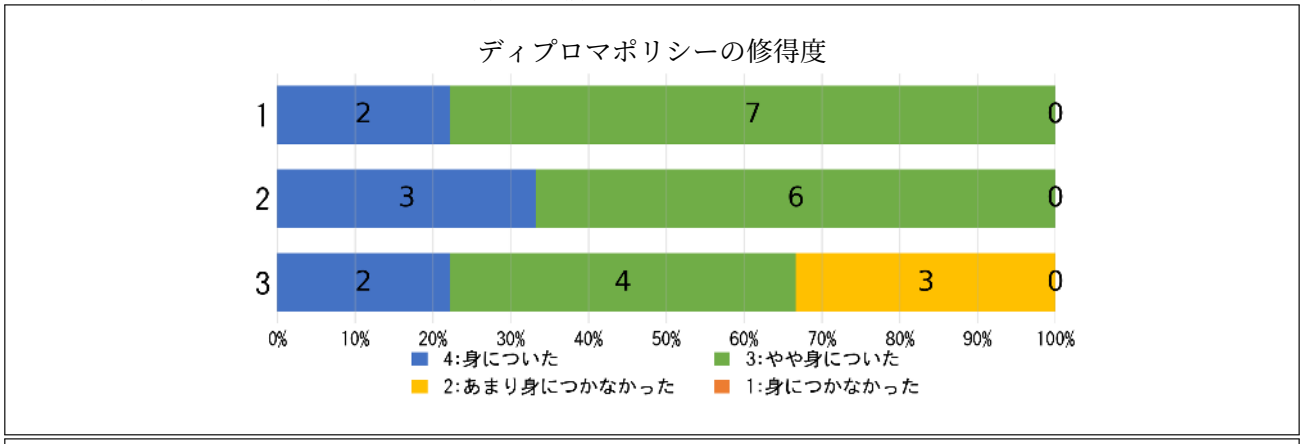
業種名	回答数	割合 (%)
5　化学工業、石油・石炭製品製造業	1	11.1
8　電子部品・デバイス・電子回路製造業	2	22.2
9　電気・情報通信機械器具製造業	1	11.1
10　輸送用機械器具製造業	2	22.2
13　情報通信業	1	11.1
20　その他の専門・技術サービス業 (建設コンサルタントを含む)	1	11.1
24　その他	1	11.1
Total	9	100.0

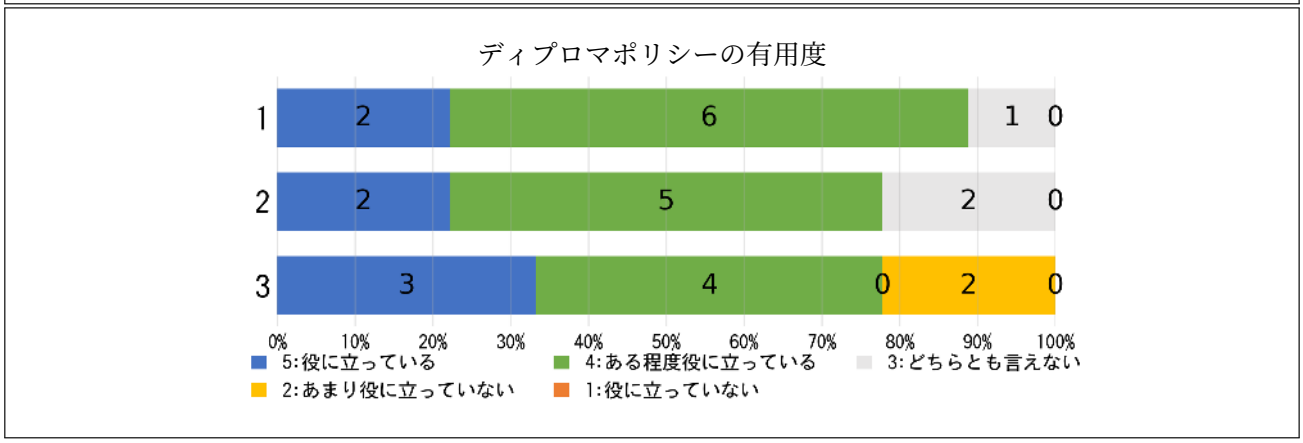
２．電子物理工学分野修了生のアンケート結果

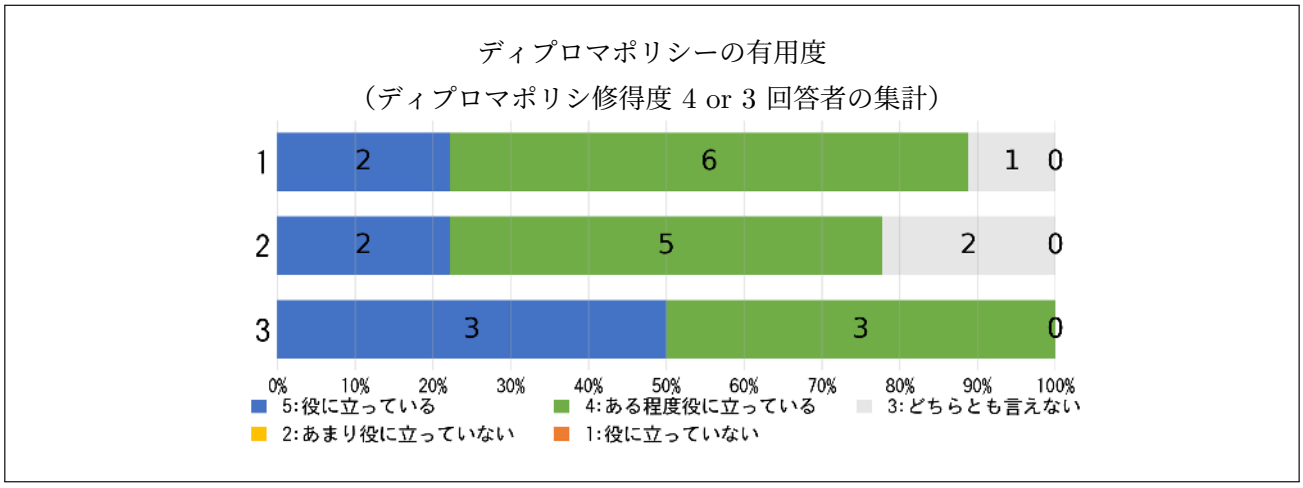
1 工学分野の高度専門知識を修得して応用できる能力

2 自ら課題を探求し、その解決に向けて高度専門知識を活用し主体的に考える能力

3 研究開発を通じて必要となる日本語や英語によるコミュニケーション能力







３．電子物理工学分野のアンケート結果の評価

１）修了生の業種から見た評価

修了生の回答数が少ないため判断が難しいが、電子物理分野の目指している業種に就職していると判断できる。

２）ディプロマポリシーについて

- 修了生の回答数が少ないため修得度については判断が難しいが、項目２（自ら課題を探求し、その解決に向けて高度専門知識を活用し主体的に考える能力）については修得できたと判断できる。
- 有用度については、項目３（研究開発を通じて必要となる日本語や英語によるコミュニケーション能力）が低かった。英語が必要な職業に就いている卒業生が少ないためと思われる。
- 就職先担当者の回答では、全ての項目で高い修得度であったと判断できる。

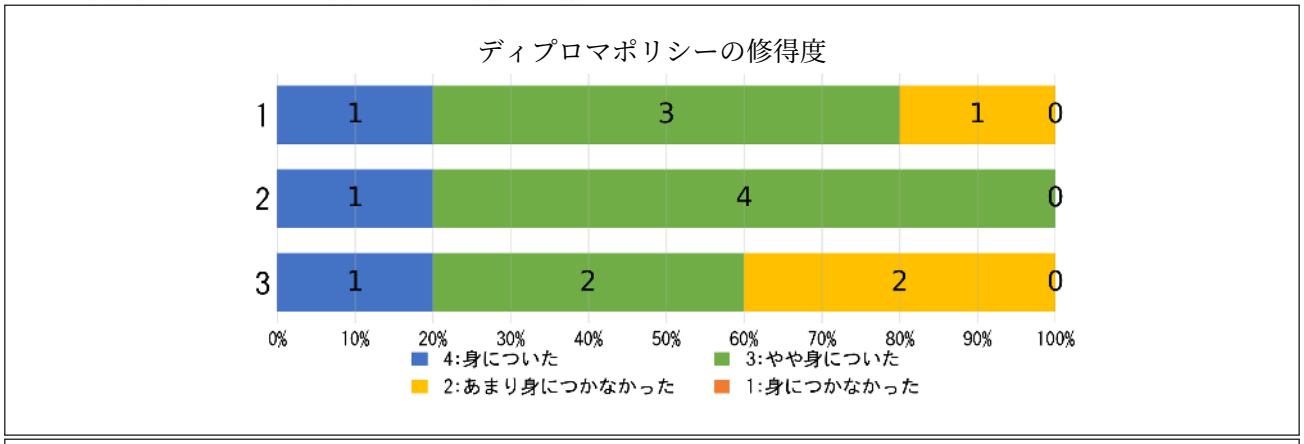
●電気システム工学分野

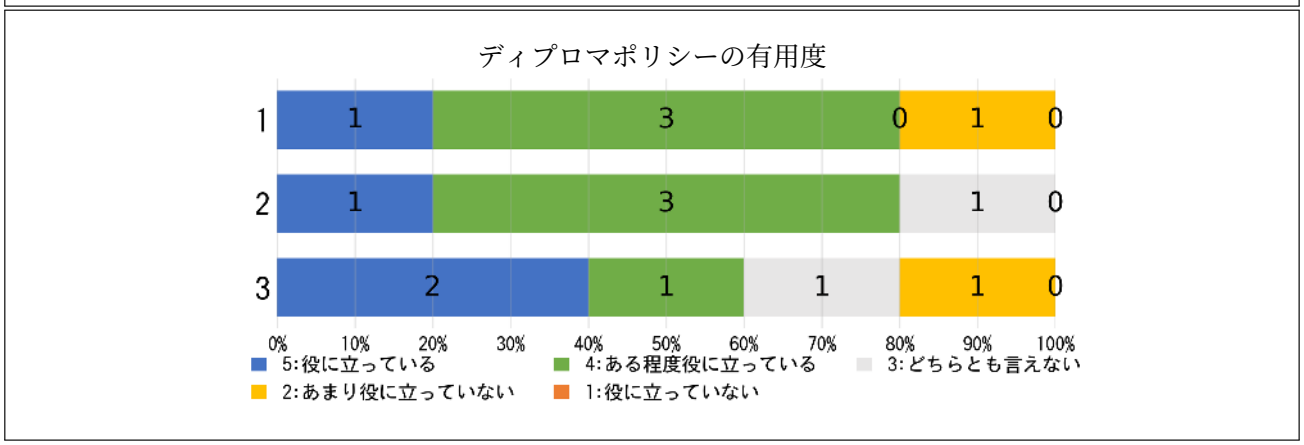
１．電気システム工学分野修了生の業種別回答者数

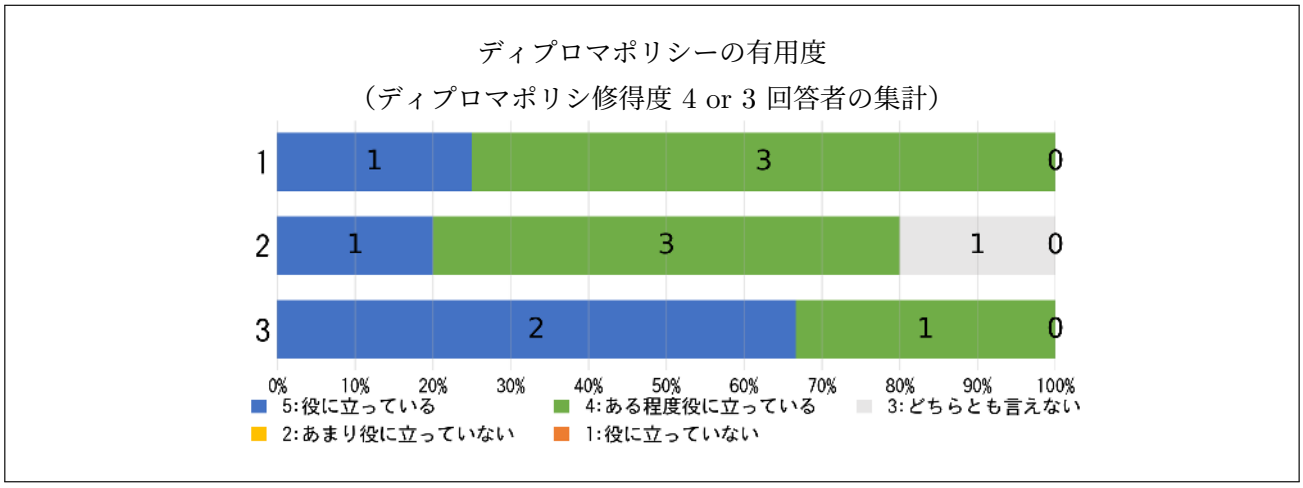
業種名	回答数	割合 (%)
8　電子部品・デバイス・電子回路製造業	2	40.0
9　電気・情報通信機械器具製造業	1	20.0
12　電気・ガス・熱供給・水道業	1	20.0
13　情報通信業	1	20.0
Total	5	100.0

２．電気システム工学分野修了生のアンケート結果

1 工学分野の高度専門知識を修得して応用できる能力
2 自ら課題を探求し、その解決に向けて高度専門知識を活用し主体的に考える能力
3 研究開発を通じて必要となる日本語や英語によるコミュニケーション能力







３．電気システム工学分野のアンケート結果の評価

１）修了生の業種から見た評価

回答者数が少ないが、（別途、就職先を調査した結果）修了生は、電気システム工学分野で修得した専門知識を活かすことができる業種に就職していた。具体的には半導体作製企業、電気通信情報起業、電力会社、電気機器製造企業である。

２）ディプロマポリシーの修得度について

3 つのディプロマポリシーにおいて、多くが肯定的に回答しているものの、日本語や英語によるコミュニケーション能力については、あまり身につかなかったとの回答がある。これは、英語によるコミュニケーション能力についての修了生の評価と考える。入学時から英語を苦手とする学生が多いことが大きな要因と思われるが、英語文献の読み合わせの時間を特別に設けるなどの工夫をしているものの大きな成果が得られていないことが反映されていると考える。

3）ディプロマポリシーの有用度について

3 つのディプロマポリシーにおいて、多くが肯定的に回答している。

以上の結果から、大部分の修了生は工学専攻が掲げたディプロマポリシーを身につけていると考える。

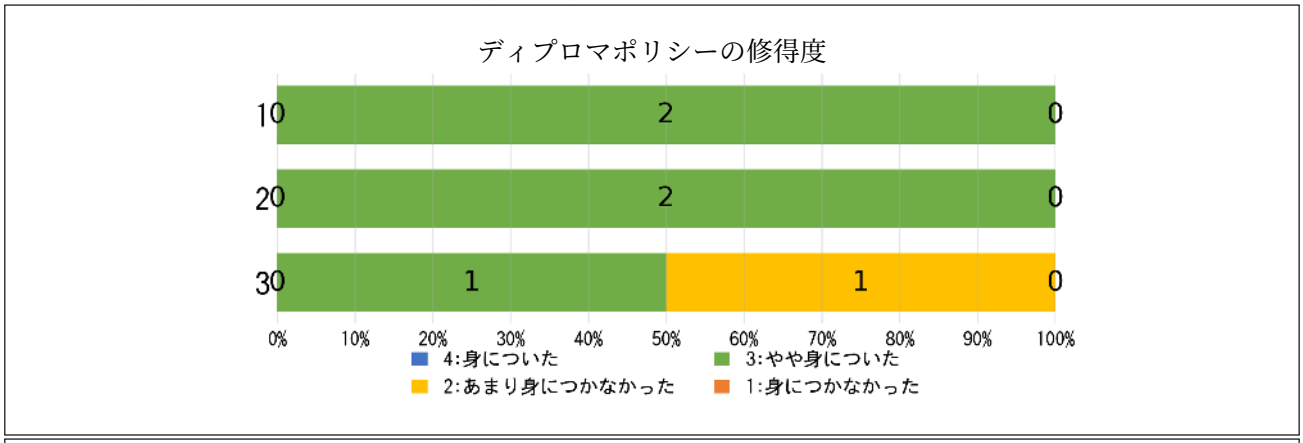
●情報システム工学分野

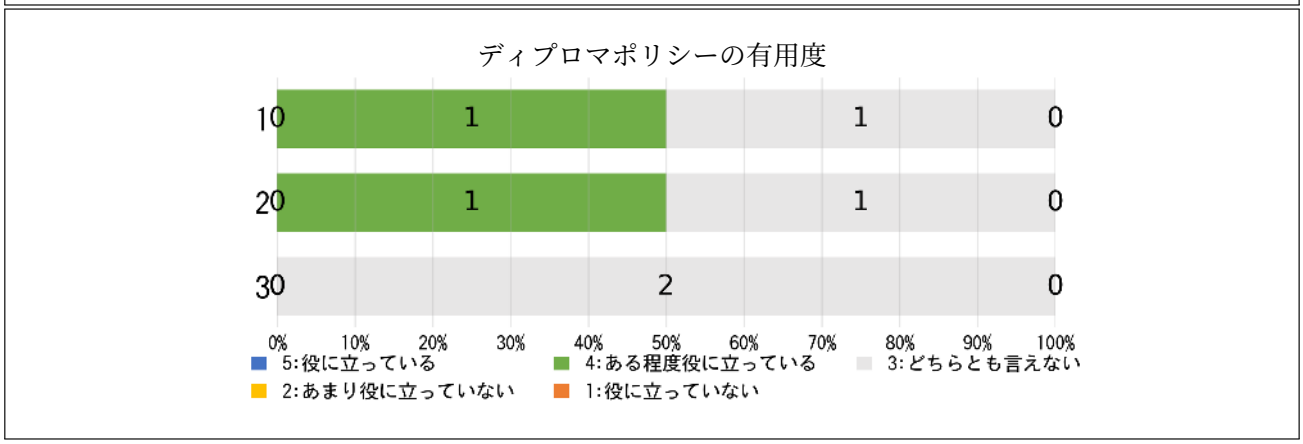
１．情報システム工学分野修了生の業種別回答者数

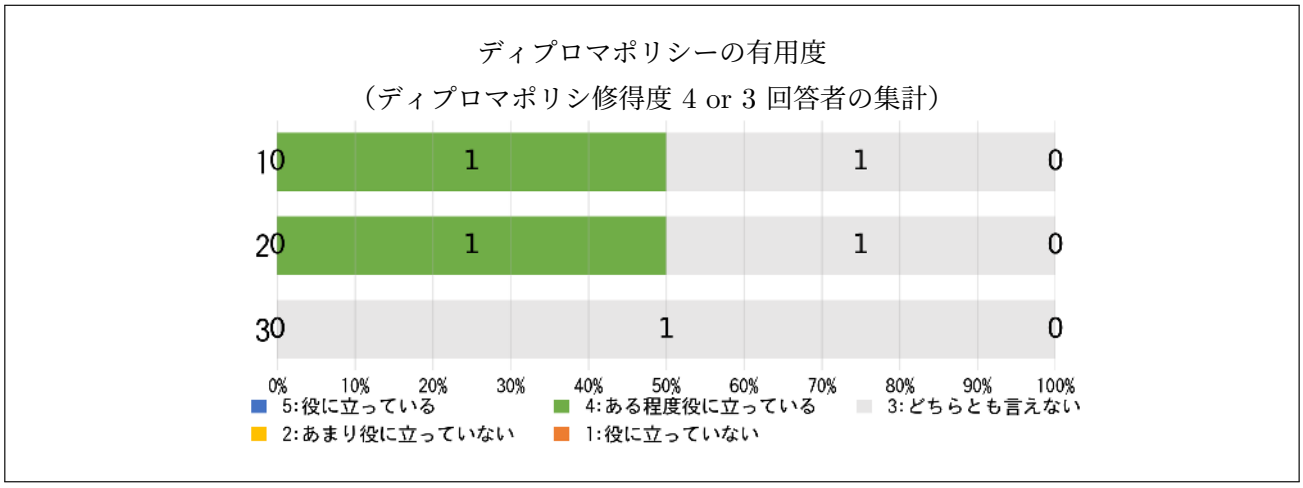
業種名	回答数	割合 (%)
13　情報通信業	1	50.0
24　その他	1	50.0
Total	2	100.0

２．情報システム工学分野修了生のアンケート結果

1 工学分野の高度専門知識を修得して応用できる能力
2 自ら課題を探求し、その解決に向けて高度専門知識を活用し主体的に考える能力
3 研究開発を通じて必要となる日本語や英語によるコミュニケーション能力







３．情報システム工学分野のアンケート結果の評価

１）修了生の業種から見た評価

アンケート回答者は 2 名。情報システム工学分野修了生の回答については詳細不明のため、とくにはなし。